

258. 2-101



1200501346617

×
複写

成田山新勝寺編
成田山事業概要
昭和十七年度



始



258.2
101

成田山事業概要

(昭和十七年度)

目次

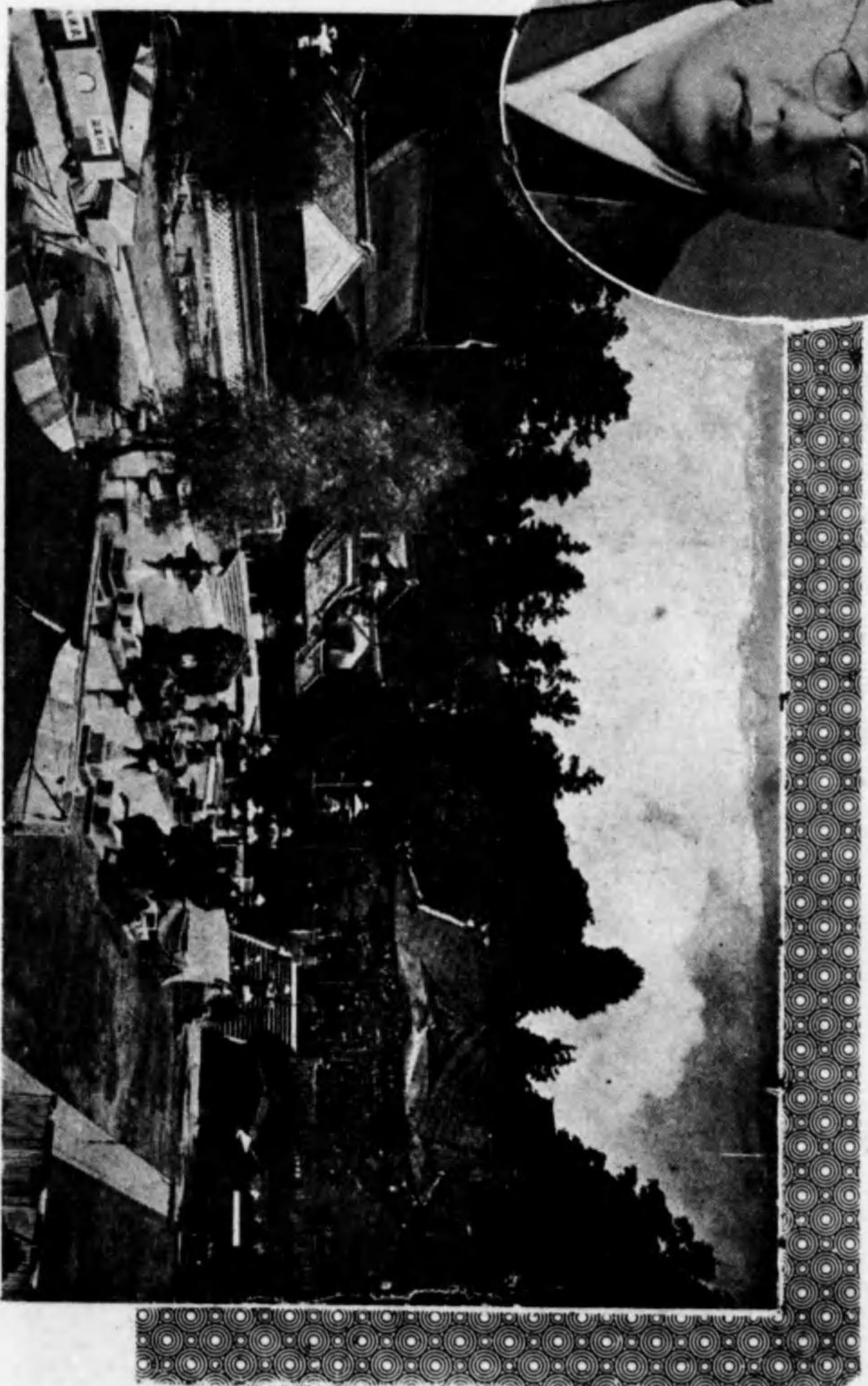
寫真	三頁
成田中學校	一五頁
成田高等女學校	二七頁
成田幼稚園	三七頁
成田學園	四九頁
成田圖書館	六一頁
新更會	六一頁

はしがき

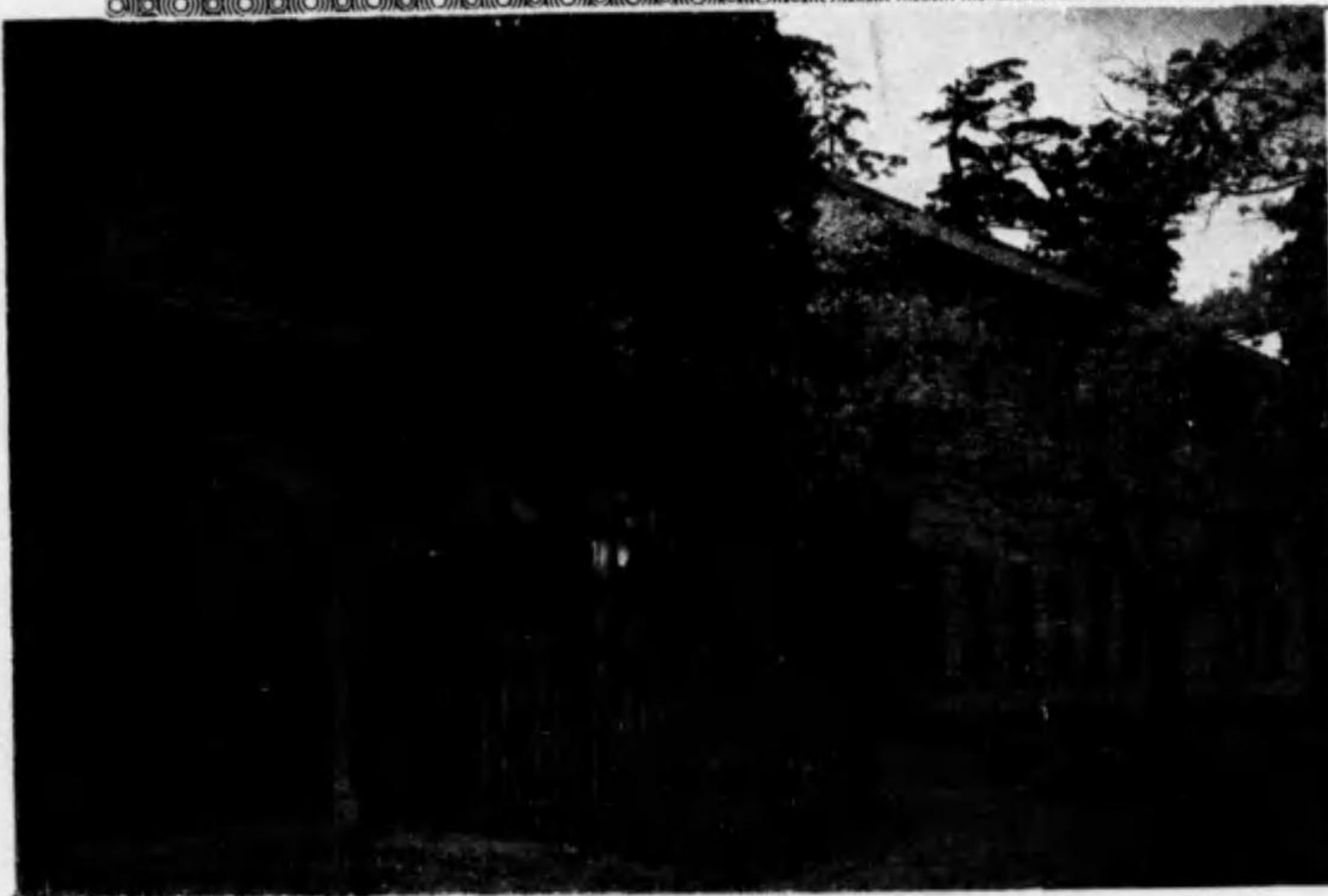
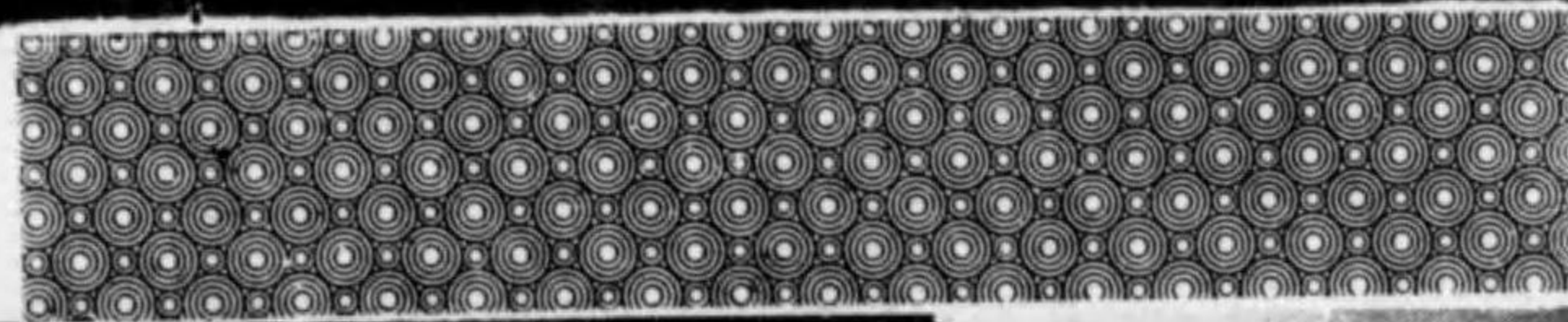
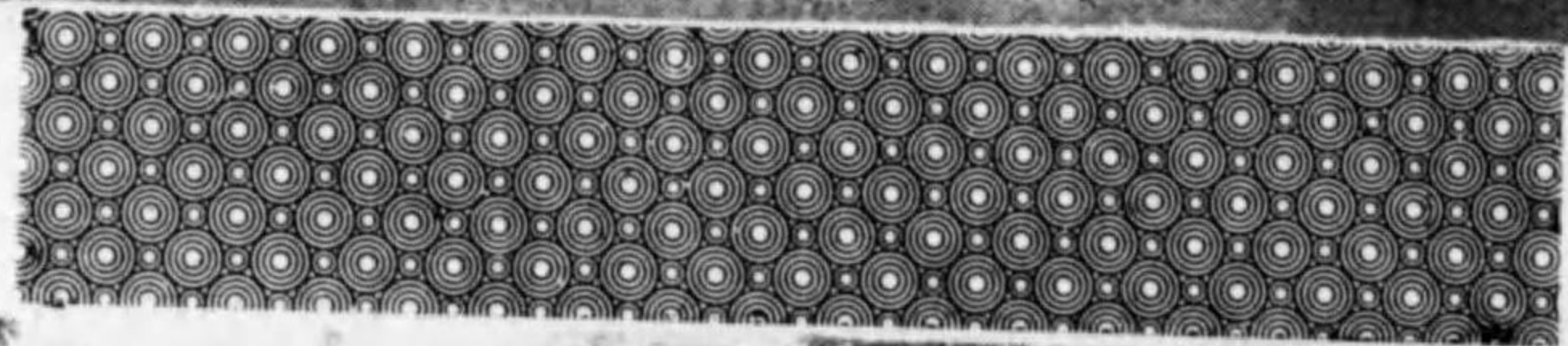
本概要は前年度まで「成田山事業年報」として成田山の經營事業たる六教育教化事業の詳細を記述して刊行したのであるが本年度より時局に鑑みその概要を摘録報告することとしたのである。

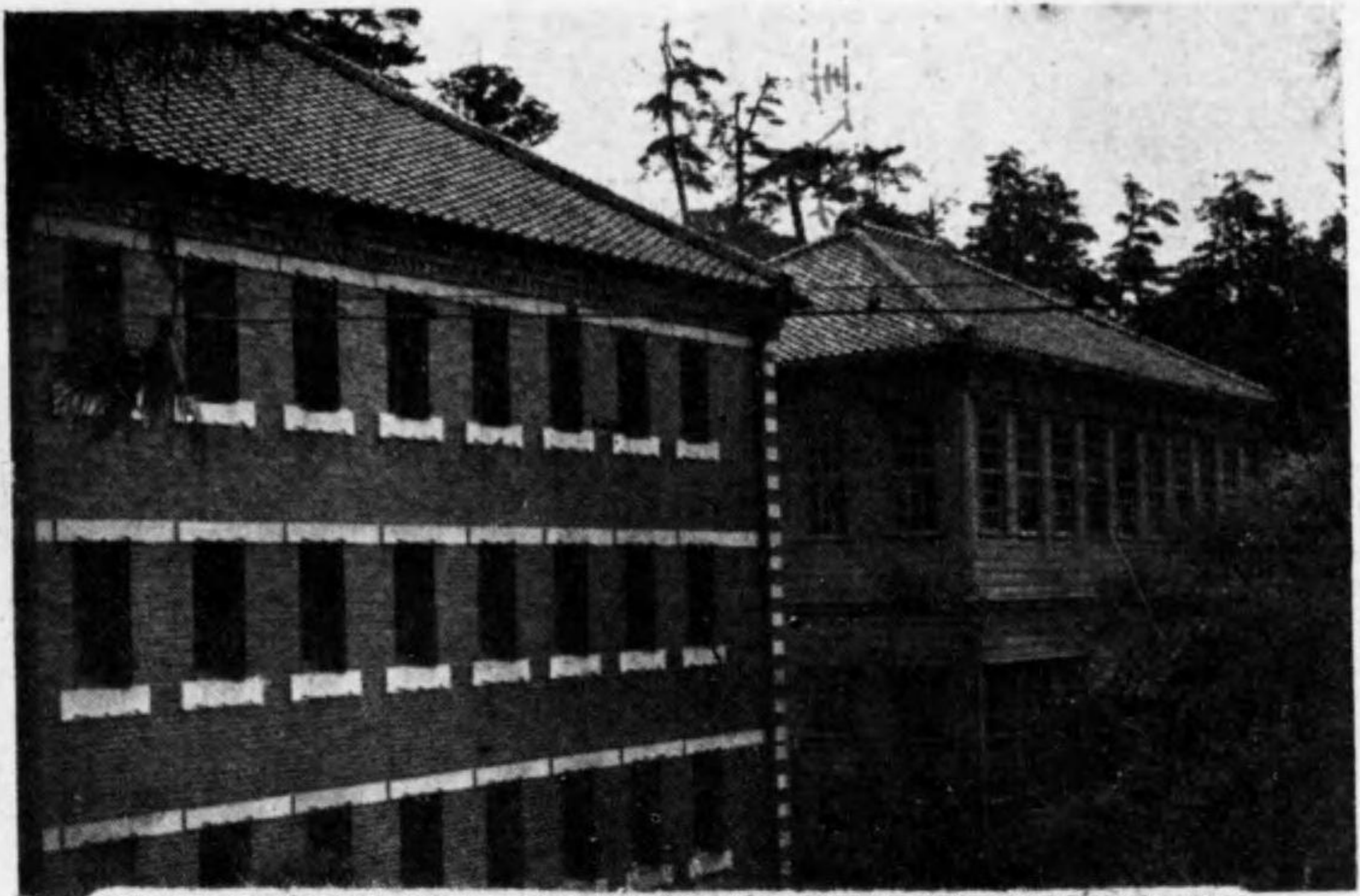
成田図書館寄贈本

荒木照定宛下

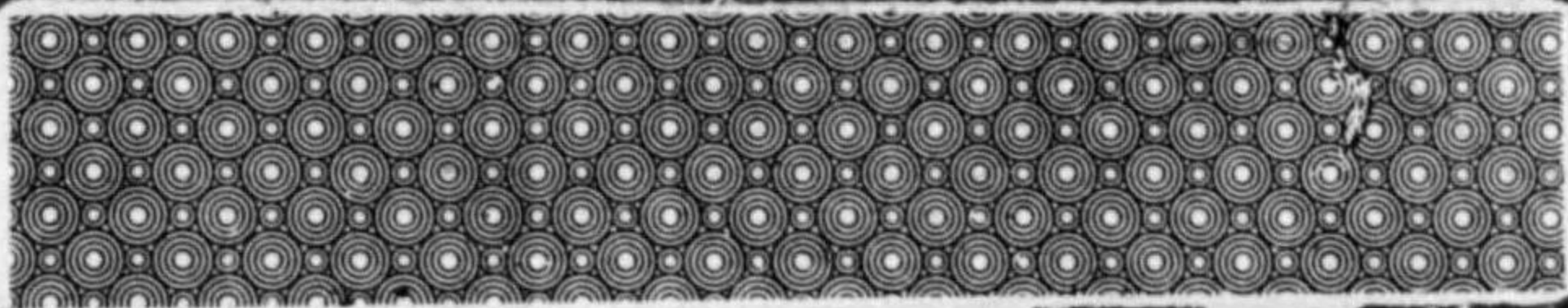


成田山全景





成田圖書館



新更會

成田山六和會に就て

六和會相談役 三橋金太郎

開基一千餘年の長きに亙る歴史ある鎮護國家の道場、成田山新勝寺に於ては、代々山主の名僧碩
 が夙に淨財を淨所に投ぜられて、地方文化の向上と社會福祉の増進とに努められ、中にも教育及
 び社會事業に就きましては、殊に大なる關心を持たれ天下に垂範するの意氣と熱情とを示して居
 られます。即ち曩に故三池僧正は英漢義塾を興して地方子弟の教育機關に充てられ、又縣下各宗經
 營感化院の社會事業に協力盡瘁されましたし、次で故石川僧正は前記英漢義塾を改めて中學校に昇
 格し、感化院を成田山の一手經營に移され、更に高等女學校、幼稚園、圖書館を設けられて、地方
 各層の教育機關を整へ、茲に所謂成田山五事業の完成を見るに至つたのであります。現實主観下
 には、社會教育事業の振興改善等の爲めに滿三ヶ年歐米各國を視察され、御歸朝後、成人教育の必
 要を認められ新更會を新設されました。これを先師の御遺業に加へ六事業として御經營になつて居
 ります。而してこの六事業の有機的組織連絡の爲めに先般開基一千年祭を好機として設立せられま
 したものがこの成田山六和會にて、専ら和を以て最先とするといふ聖德太子の御思召に則られ、貌
 下自らこの御命名をなされたものであります。茲に我々はこの名を辱しめず、これによつて六事
 業の内容の各個充實は勿論、相互連絡融和の円満なる統制下に協力一致以て各自の使命達成進展を
 圖らんことを、六事業關係諸氏と共に誓つて止まないものであります。

成田中學校

一位 置

本校は成田町成田二十七番地に在り、東南部は成田町の一部に面し、西は成田高等女學校に接し、北には成田山公園櫻山の勝地を控へ、一望開豁、遠く田園を見渡す閑靜な丘腹に位置して居る。

二 沿革

本校は明治三十一年十月七日、其の前身である成田英漢義塾を廢止して、新に成田中學校を設置、其の筋の認可を得て開校したものである。今其の沿革の大要を示せば次の通りである。

英漢義塾時代

現成田中學校の前身である英漢義塾は明治二十年十月三日當時の住職三池僧正が地方中等教育機關の設備なきことを嘆き、故石川甚兵衛氏（正英翁）故諸岡勝太郎氏（先代）等と謀つて創立、成田町成田字東谷の地、即ち現圖書館敷地の下に校舎を建て、翌二十一年一月五日開校式を挙げた中等程度の學塾で、修業年限三ヶ年、高等小學校卒業以上及びそれと同等以上の學力のあるものを收容した。

成田山六和會規則

第一條 本會ハ成田山新勝寺ノ經營ニ係ル左記六事業ノ統一進展ヲ計ルヲ以テ目的トス

- 一、成田中學校
- 一、成田高等女學校
- 一、成田圖書館
- 一、成田幼稚園
- 一、成田學園
- 一、成田山新更會

第二條 本會ヲ成田山六和會ト稱ス

第三條 本會ノ事務所ヲ新勝寺内ニ置ク

第四條 本會ハ六事業代表者並ニ特別關係者ヲ以テ之ヲ組織ス

第五條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

- 一、會長 一名
- 一、副會長 一名
- 一、相談役 二名
- 一、委員 五名
- 一、臨時委員 六名
- 一、幹事 一名
- 一、書記 若干名

第六條 役員ノ選任

一、會長ハ成田山貫首之レニ當リ會務ヲ總監ス

一、副會長ハ成田山執事トシ會長ヲ補佐シ會長不在ナル時ハ其ノ任ニ當ル

一、相談役ハ會長ノ囑託ニヨリ其ノ諮問ニ應ジ會議ニ參加スルモノトス

一、委員ハ成田山檀徒總代人トシ臨時委員ハ六事業代表者ヲ以テ之ニ充テ六事業經營ニ關シ協議ニ與ルモノトス

一、幹事ハ會長之レヲ任命シ會長ノ命ヲ受ケ其ノ事務ヲ處理ス

一、書記ハ會議ニ際シ其ノ事務ヲ掌ル

第七條 本會ハ年二回總會ヲ催シ六事業代表者ヨリ豫算決算並ニ經營ニ關スル經過報告ヲ聽取スルモノトス

第八條 本會ハ毎月一回例会ヲ開ク

第九條 凡テ重大ナル事項ハ會長之ヲ決ス 以上

成田中學校時代

明治三十一年八月十三日少僧正峰川（後服部と改姓）照和師は當時在歐中の塾主石川僧正の命を受け、英漢義塾を廢し中學校を新設の件に就いて其の筋へ要請し、同年十月七日を以て認可された。かくして同年十一月舊英漢義塾を現在の講堂に移轉し、喜田貞吉氏を聘して初代の校長とし、十一月一日から中學校としての授業を開始した。しかし當時の生徒数は一年級五十五名、二年級三十五名、三年級十二名、計百二名であつた。越えて同三十二年六月十三日校舍改築の件が認可となつたので、すぐ淺井造氏、宮田半左衛門氏、諸岡市郎左衛門氏、飯倉郁太郎氏、三橋金太郎氏等が委員となつて、校舍改築に着手したが喜田校長には同年八月退職され、本校の顧問となつた。而して同三十三年には徵兵令第十三條による徵兵猶豫の特典に浴し、且つ改築中の校舍も同年六月に至つて竣工した。時恰も石川僧正は外遊を終へて歸朝せられたので同月二十七日盛大なる落成式を舉行し、文部大臣樺山資紀閣下並びに朝野の名士が多數參列された。其の後同四十二年に至り武道場（四十坪）を運動場の北側に新築する外、銃器庫（十八坪二五）の新築生徒控場の改築（七十二坪）を行ひ、大正三年十月には生徒定員二百五十名に増加の件認可、昭和二年九月には同定員四百五十名と、五學級増加の件認可となり、十學級となつた。尙ほ昭和三年五月には、講堂理科教室の新築並びに普通教室の増築が竣成し、又運動場の擴張を行ひ、武道場を増築して現在の所に移轉した。更に同六年には工作室、金工室完成、同七年十二月には武道場表玄関の完成、同八年九月には博物教

室（四十坪）の新築が完成した。しかして明治三十一年創立以來昭和十八年三月に至るまで四十二回の卒業生を出し、其の數千六百八十七名に及んで居る。此の間文部次官奥田義人氏、商工局長木内重四郎氏、板垣退助伯、文部省普通學務局長田所美治氏、文部省參政官大津淳一郎氏、陸軍大將福島安正閣下、文科大學長上田萬年氏、千葉縣知事石原健三閣下、同折原己一郎閣下等の諸名士が或は卒業式に、或は實況視察に來校せられ、當山の文化事業に對する努力に深甚の敬意を表せられた。明治二十年英漢義塾創立以來昭和十八年三月に至る迄年を關すること五十六年（滿五十四年六ヶ月）中學校と改稱してから四十五年（滿四十四年七ヶ月）に及んでゐる。昭和七年創立三十五周年記念式を舉行、故三池、石川、服部僧正、故石川正英翁、故諸岡勝太郎氏に、墓前報告を行ひ、理事三橋金太郎氏に感謝狀を贈つた。本校に理事を置き、三橋金太郎氏は創立當初から石川甚兵衛氏は昭和三年四月から共に其の任に當られてゐたが、昭和十三年三月十九日「成田山六和會」の組織せらるゝに及んで理事制は廢止となつた。

三 設 備

- 一、校地坪數 三、五〇〇坪
- 二、校舍建物坪數 六五〇坪
- 三、設備（校舍）木造二階建（但し講堂は鐵筋コンクリート）にして其の内譯左の如し

室名	數	坪數	室名	數	坪數	室名	數	坪數
勅語奉安室	一	・七五	講堂	一	八一・〇〇	校長室	一	八・七五
職員室	一	一九・二五	事務室	一	六・〇〇	報國室	一	九・〇〇
應接室	一	六・〇〇	休養室	一	六・〇〇	普通教室	一〇	一七九・〇〇
物象教室	一	三〇・〇〇	生物教室	一	一六・七五	生物標本室	一	二二・〇〇
圖書手工教室	一	一六・七五	金工室	一	二七・五〇	物象室	一	一五・〇〇
機械室	一	三二・二五	天秤室	一	三・〇〇	寫眞暗室	一	一・五〇
藥品室	一	三・〇〇	會議室	一	九・〇〇	昇降口	一	一八・〇〇
生徒浴室	一	七二・〇〇	武道場	一	八〇・〇〇	銃器庫	一	一八・〇〇
便所	一	九・五〇	物置	一	一五・〇〇	小使室	一	四・〇〇
湯飲所	一	四・〇〇	薪炭庫	一	三・〇〇	體操器具置場	一	四・〇〇
階下倉庫	一	四・〇〇	廊下階段等	一	一一五・五〇			
計		八九〇・〇〇						

四 趣旨並びに教育方針

設立の趣旨

本校は成田山新勝寺經營六大教育事業の一にして、皇國の道に則り専ら中學校令に據る中等教育を施し、以て國家の要請する忠良なる皇國民を鍊成せんが爲めに設立せしものなり。

教育方針

本校の教育方針は本校設立の趣旨に基きて、先づ「皇國民を鍊成」するにあり。換言すれば皇國の道に則りて、自我功利の觀念を放擲し、献身報國の生活に精進する眞の皇國民即ち「負荷ノ大任ヲ全フスル」忠良の臣民を鍊成するにあり、従つて訓練の核心は、一に御詔勅の聖旨を奉戴し、實踐要目としては質實剛健の氣風を振勵し、剛毅、禮讓、報恩、規律の諸徳を重んじ、勤勉にして勞苦を樂しむ實力と良風の養成に邁進せしむることに存す。

五 一般的施設

一、校務部

- (1) 教務 (重要會議、監督、時間割、統計) 教務主任 (首席教諭) 教務係四人 (教諭)
生徒監四人 (教諭) 學級主任、教科、修練主任
- (2) 事務 (庶務、會計) 書記

二、報國團 在來の校友會を發展的改組し、成田中學校報國團を組織して、昭和十六年四月二十九日の天長節の佳節を卜し結團式を挙げた、

(1) 總務部 各部の事業の企畫、連絡、統制に當り、庶務會計及び各種團體との折衝を取扱ふ。

(2) 鍛鍊部 イ、勤勞班 ロ、劍道班 ハ、柔道班 ニ、体操競技班

(3) 學藝部 イ、藝能班 ロ、圖書班 ハ、講演映画班 ニ、科學班 ホ、團報班

(4) 國防訓練部 イ、戰技運動班 ロ、國防特技班 ハ、海洋班

(5) 生活部 イ、保健衛生班 ロ、配給班 ハ、通學聯盟班 ニ、軍人援護班 ホ、工作班

三、課外教授 上級學校に進む者に對しては、毎週放課後特別指導をなし、學力の向上を圖り、成績不良の者に對しては、夏季冬季の授業停止期間を利用して特別指導を行つて居る。

四、カード作製

五、研修旅行

六、校外監督 映画館、飲食店等風紀上面白からざる場所に立入ることを防止する爲め、校外監督を嚴重行つてゐる。

七、家庭連絡 毎年父兄會を催して父兄と懇談を遂げ、尙ほ機會ある毎に家庭を訪問して學校との連絡を圖る。

八、朝禮 毎朝始業前、校庭或は雨天體操場に集合して行ふ、特に宮城遙拜後不動尊の方向に

向つて一同拜禮を行へり。

九、參拜、年賀、墓參 毎月八日並に大祭日には、埴生神社に參拜し、毎月八日並に學期始業日には不動尊に拜詣する。年頭始業日には不動尊の參詣後校主親下(現貫主)に年頭の挨拶をなす。三池、石川僧正の御命日には職員生徒一同墓參焼香をなす。

一〇、謝恩會 報恩感謝の微衷を表する爲め、卒業式終了後卒業生一同は主任引率の下に、不動尊に參詣し、歸校後謝恩會を開く。

六 生徒狀況

○ 卒業生數

成田英漢義塾

自明治二十三年(第一回) 至同三十一年(第九回) 四八名

外に選修履修生 六名

成田中學校

自明治三十四年(第一回) 至昭和十七年(第四十二回) 一、六八七名

卒業生及生徒郡別表 (昭和十八年四月現在)

學級	第五學年		第四學年		第三學年		第二學年		第一學年		計
	A組	B組	A組	B組	A組	B組	A組	B組	A組	B組	
印旛	二九	二八	四二	三七	四五	四五	三八	三七	四九	四九	一三〇
取山	二	三	四	三	二	二	三	二	二	二	一一三
武千	二	二	三	八	四	四	二	三	三	三	一〇三
葉市				一							八
原東											四
葛匠											三
彦海											五
上長											一
生夷											五
隅君											四
津安											四
房他府縣	三	二			四	四	一	二			七一
計	三六	三五	四九	五二	五四	五四	四四	四四	一五	一五	二〇四
											四六
											六六
											六七

七 歷代校主、顧問、校長、主監

一、校主

石川 照勤 (明治三十一年七月—大正十三年一月)

校主兼名譽校長

荒木 照定 (大正十三年二月—現在)

二、顧問

白鳥 庫吉 (明治四十一年九月—昭和十七年四月)

喜田 貞吉 (明治三十一年十一月—三十二年八月)

竹内 楠三 (明治三十二年八月—三十四年七月)

石川 照勤 (明治三十四年七月校主自ラ學校長ヲ兼ネ以後大正十三年笹川氏就任マデ實務代理又ハ主監ヲ置キテ統監ス)

栗根 鐵藏 (校長事務代理) (明治三十五年七月—四十一年九月)

葛原 運次郎 (校務主監) (明治四十一年九月—大正二年七月)

佐竹 元二 (同) (大正二年七月—大正五年三月)

佐藤 禮云 (同) (大正五年三月—大正八年七月)

濱田丑之助(同)——(大正八年七月—大正九年九月)
 名川彦作(同)——(大正九年九月—大正十三年一月)
 笹川種郎(學校長就任)——(大正十三年一月—同十四年三月)
 小林力彌(同)——(大正十四年三月—昭和三年五月)
 增田榮(同)——(昭和三年五月—同九年五月)
 今澤慈海(同)——(昭和九年五月—同十五年四月)
 横田泰邦(同)——(昭和十五年四月—現在)

八職員

(昭和十八年四月現在)

受持學科	職名	氏名	原籍	就職年月
校主兼校長	荒木照定	千葉縣	大正十三年二月	
校長兼教諭	横田泰邦	愛知縣	昭和十五年四月	
修身・英語	川瀬信雄	岐阜縣	昭和十六年一月	
國語・漢文・實業	片山辰雄	長崎縣	昭和十四年四月	
國語	三門健一	千葉縣	大正十五年四月	
地理・公民	寺內保	千葉縣	大正十四年四月	

英語	教諭	宮野恭造	廣島縣	昭和十六年八月
英語	教諭	三橋鑛一	東京府	昭和十七年四月
歷史	教諭	松木植太	山口縣	昭和十八年四月
圖画・工作	教諭	淺津寅吉	新潟縣	昭和十七年四月
柔道	教諭兼書記	榎田正巳	千葉縣	大正七年一月
數學	教諭	齋藤半六	埼玉縣	昭和十二年十月
修練	教諭	本地主正	廣島縣	昭和十八年四月
國語・漢文	教諭	松山俊雄	千葉縣	昭和九年十月
生物	教諭	佐瀬俊旭	千葉縣	昭和十八年四月
數學	助教諭	石川保憲	千葉縣	昭和十八年四月
物象	助教諭	新谷爲中	千葉縣	昭和十七年九月
教練	教諭心得	細矢末吉	千葉縣	昭和三年四月
劍道・習字・園藝	囑託	邊田金治郎	千葉縣	昭和五年四月
教練・體操	囑託	齋藤理平	千葉縣	昭和十六年七月
數學・物象	囑託	横田哲郎	愛知縣	昭和十六年四月
音樂	囑託	北爪利世	東京府	昭和十八年四月
劍道	教師兼書記	南井榮助	千葉縣	明治三十四年四月

教員	配屬	小柳隆照	千葉縣	昭和十七年四月
	陸軍中尉			
	校醫	藤崎公道	千葉縣	昭和十八年一月
	校醫齒科	萩原村治	千葉縣	昭和五年五月
英語	囑託	(西原鹿之助)	靜岡縣	昭和四年四月
歴史	囑託	(長田實)	東京府	昭和十六年六月

九 經費

年度	費目
昭和十七年度	俸給
決算額	雜給
	需用費
	雜費
	賞與
	退職慰勞
	營繕費
	計

成田高等女學校

一、位置

本校は成田町成田十五番地にあり、東に中學校を控へ、西に圖書館を擁し、背部即ち北方は、成田山公園に接して、亭々たる古松、巨木は鬱蒼と茂り、南は成田の街衢を展望し、眞に女子教育の場所として好適の所である。

二、沿革

本校は成田山經營に屬する女子教育事業にして、もと『私立成田山女學校』として創立し、後『成田高等女學校』と改稱せられたものであるが、創立當時前貫首故石川大僧正校長としてこれが經營の任に當られ、大正十三年一月同師遷化後は、現貫首荒木大僧正校長兼名譽校長として其經營を繼承し、逐年益々其の實績を向上されつゝある。

- 一 明治四十一年二月二十一日日本縣知事より私立成田山女學校設置の件認可さる。
- 一 明治四十四年二月十三日文部大臣より私立成田山女學校を廢し、成田高等女學校設置の件認可さる。
- 一 明治四十四年三月二十一日校則を制定す。

- 一 明治四十四年四月一日成田中學校教諭中島喜一校務主監兼教諭に任ぜらる。
- 一 明治四十四年四月一日、二日の兩日を以て二・三・四年の編入試験を行ふ。
- 一 明治四十四年四月五日合格者八十四名に入學を許可し、これを本科第四年以下に編成し、同日始業式を行ふ。
- 一 明治四十五年三月第一回卒業生を出し、千葉縣知事臨席す。
- 一 大正元年十一月増築の講堂兼雨天體操場・理科教室・普通教室等竣工す。
- 一 大正二年九月校務主監兼教諭中島喜一休職を命ぜらる。
- 一 大正二年十月理學士菅野皆可校務主監兼教諭に任ぜらる。
- 一 大正六年十一月菅野校務主監休職を命ぜらる。
- 一 大正六年十一月文學士中村安之助校務主監兼教諭に任ぜらる。
- 一 大正八年十月中村校務主監死去。
- 一 大正八年十二月文學士矢野太郎校務主監兼教諭に任ぜらる。
- 一 大正十二年十二月矢野校務主監依願解職。
- 一 大正十三年一月校主兼校長石川大僧正御遷化。
- 一 大正十三年二月成田山貫首荒木大僧正校主の認可を受く。
- 一 大正十三年二月文學士笹川種郎校長に任ぜらる。

- 一 大正十三年五月元神奈川縣立横濱第一中學校教諭佐藤國二校務主監兼教諭に任ぜらる。
- 一 大正十四年三月笹川校長辭任。
- 一 大正十四年三月校務主監兼教諭佐藤國二校長兼教諭に任ぜらる。
- 一 大正十四年四月笹川前校長本校顧問となる。
- 一 大正十四年七月理事小野寺精三郎死去。
- 一 昭和二年三月校主荒木大僧正を名譽校長に推戴す。
- 一 昭和二年四月理事三橋重郎兵衛病氣辭任す。
- 一 昭和十三年三月理事制を廢止す。
- 一 昭和十七年三月校長佐藤國二依願解職。
- 一 昭和十七年六月船越文教校長兼教諭に任ぜらる。
- 一 昭和十八年三月第三十二回卒業生五十一名を出す、之を以て卒業生累計一千二百八十七名となる。

三、昭和十七年度行事概要

四 月

六日 入學式、始業式、入學者父兄會。七日 大木教諭、石井教諭送別式。八日 大詔奉戴日ノ行

事、國旗掲揚、宮城遙拜、不動尊、埴生神社ニ參拜、大東亞戰爭完遂祈願、戰歿將兵ノ墓參、午後宗吾靈堂ニ鍛鍊行軍。東教諭新任披露式。十八日 午後空襲警報アリ、警戒ノ任ニ當ル。
廿三日 新更會館ニ海軍展覽會ヲ參觀。廿九日 天長節祝賀式ヲ舉グ。

五月

一日 上草教諭新任披露式。二日 麻生教諭送別式。八日 大詔奉戴日ノ行事實施。九日 午后全國体操大會參加体操實演。十九日 身体検査施行。廿三日 本校自衛隊組織。廿五日 四年三年生徒百三名ハ平野、齋藤、岡城寺、東、上草ノ五教諭引率、宮城外苑整備奉仕作業ニ當ル、東京宿泊。
廿六日 三、四年生多摩御陵參拜、高尾山行軍。一、二年生三里塚行軍。廿七日 三、四年生明治神宮、靖國神社ニ參拜、海軍記念館、東日天文臺見學ノ上歸還

六月

一日 船越校長新任披露式。三日 三里塚御料牧場ニ除草作業。四日 口腔衛生講話並ニ齒牙検査。
六日 三里塚御料牧場ニ除草作業。九日 三里塚御料牧場除草作業終了。二十日 本日ヨリ三日間農家出身生徒ハ自宅勤勞、其他ハ學校農園或ハ校舍内外ノ作業。廿六日 本日ヨリ三日間農繁期勤勞作業。廿七日 農家出身者以外ハ郷部方面ニ除草作業。廿八日 圍護台及不動丘ニ除草作業。

七月

六日 弓道部選手、千葉縣女子中等學校競技大會ニ出場。七日 支那事變第五週年記念勅語奉讀式。

八日 大詔奉戴日ノ行事實施。十四日 川村本縣知事巡視。十六日 學期末考查、本日ヨリ三日間。
十七日 埴生神社大祭ニ參列、午後成田國民學校ニ於ケル防諜ニ關スル講演ト映画ノ會ニ臨ム。
廿五日 防空演習施行。廿七日 一、二年生谷津海岸ニ遠足。三十日 明治天皇式年祭舉式。
卅一日 第一學期終業式。

八 月
一日 學校農園、幼稚園、不動尊境内、本校及圖書館構内ノ勤勞作業。八日 大詔奉戴日ノ行事實施。

九 月
一日 第二學期始業式。八日 大詔奉戴日ノ行事實施。十四日 渡邊体操教師新任披露式。十五日 滿洲國承認十週年慶祝訓話。三、四年生帝國農會ノ勤勞作業ニ出動。廿二日 新谷物理教師ノ新任披露式。廿六日 新更會主催ノ司法保護事業講演會ニ臨ム。

十 月
一日 白井數學教師ノ新任披露式。三日 軍人援護ニ關スル勅語奉讀式。佐倉陸軍病院ヲ慰問、營内見學、弓道部員ハ傷病兵ト練習試合ヲナス。四日 佐倉高女弓道部選手來校、練習試合。八日 大詔奉戴日ノ行事實施。十六日 靖國神社臨時大祭、英靈ニ默禱。十七日 神嘗祭、皇太神宮遙拜。廿七日 東京行、レオナルド、ダヴィンチ展覽會、文展、博物館等見學。三十日 教育勅語奉讀式、學制頒布七十年記念訓話、式後中間考查。

十一月

三日 明治節祝賀式後体操祭。八日 大詔奉戴日ノ行事實施。午前九時ヨリ校内ニ於テ体操大會。
 十六日 四年級鎌倉方面ニ鍛鍊旅行、校長、齋藤、東、上草教諭引率。十八日 四年生歸還。
 廿三日 埴生神社祭典、校長生徒代表參列。

十二月

三日 成田中學ニ教練査閲見學。八日 大詔奉戴日ノ行事實施。午前六時大東亞戰爭一週年記念成
 田町民大會ニ參加。九日 三、四年生徒午后新更會館ニ於ケル時局講演會聽講。十四日 不動尊埴
 生神社ニ戰勝祈願。十七日 本日ヨリ三日間學期末考査。廿六日 第二學期終業式。

一月

一日 新年拜賀式。昨夜ヨリ本日ニカケテ三、四年生堂庭ニ於テ護摩受附奉仕。八日 大詔奉戴日
 ノ行事實施。九日 寒中鍛鍊トシテ本日ヨリ二月三日マデ毎朝始業前不動尊參拜ノコトトシ直ニ實
 施。廿七日 午后押畑ニ耐寒行軍。廿八日 生徒製作ノ慰問人形展。

二月

八日 大詔奉戴日ノ行事實施。十一日 紀元節祝賀式舉行。十二日 本校創立記念式舉行。

十三日 學藝音樂會開催。

三月

五日 成田國民學校ニ於ケル朝日新聞社主催大東亞戰爭寫真展覽會參觀。六日 地久節祝賀式。
 八日 大詔奉戴日ノ行事实。入學考査準備。九日 本日ヨリ三日間入學考査。十一日 四年生幼稚園
 見學。十三日 入學考査合格者發表。
 十五日 本日ヨリ三日間學年末考査。國民學校ニ於ケル印旛郡内戰歿者慰靈祭ニ參列。廿三日 四
 年生ニ對スル豫餞會。廿五日 卒業證書授與式。廿六日 新卒業生謝恩大護摩修行。三、四年生佐
 倉陸軍病院ニ勤勞奉仕。廿八日 齋藤教諭送別式。

四、設備

一、校地坪數 一、〇六八坪。二、校舍建物坪數 四一一坪。三、設備（校舍ハ木造二階建）

室名	數	坪數	室名	數	坪數	室名	數	坪數
普通教室	四	八一・五〇	校長室	一	八・七五	職員室	一	一二・二五
講堂 (音樂室)	一	六〇・〇〇	事務室 (兼宿直室)	一	三・七五	物置	二	一四・〇〇
昇降口	二	一二・五〇	小使室	一	六・二五	家事室	二	一二・〇〇
洗面所	三	三・二五	理科室	一	一二・五〇	便所	三	一〇・〇〇
器械標本室	二	一七・五〇	理裝室 (兼衛生室)	一	三・七五	裁縫室	二	一二・五〇

体操・武道	教諭	市原富美子	千葉縣	昭和十八年四月
家事・物象	教諭	上草とよ	千葉縣	昭和十七年四月
博物・地理	教諭心得	海寶愛次郎	千葉縣	昭和十五年四月
地理	書記兼教諭心得	神尾純郎	千葉縣	昭和十三年四月
數學	同	白井傳三郎	長野縣	昭和十七年十月
圖画・書道・工作	同	原竹男	福島縣	昭和十八年四月
音樂	同	岡崎政子	茨城縣	昭和十八年四月
物象	同	加賀宣勝	愛知縣	昭和十八年四月
挿花・茶道	同	櫻井文吉	千葉縣	大正十五年四月
按摩	同	酒井泰作	福島縣	大正十四年三月
弓道	同	布施明治	千葉縣	昭和十三年十一月
同	同	山内平次郎	千葉縣	明治四十四年四月
同	同	三須重五郎	千葉縣	昭和五年五月
學校醫	學校齒科醫			

一一、經費

昭和十七年度	俸給	給雜	給校	費	修繕費	退職給與金	死亡贈金	計
決算額	一三、六九〇	二、八二五	六、七二四	四六八	二七〇	一三、九六八		

成田幼稚園

一位 置

本園は成田驛を距る約三丁成田町成田六百三十五番地の高燥なる地にありて翠巒滴る森に包まれ人家を離れた閑靜廣潤なる地域を占め 南西北の三面は成田市街に臨み成宗電車を崖下に瞰下し東部は田圃が廣々と開けて清澄の氣漂ひ夏は涼しく冬暖かく幼児保育の地としては最適の場所である

二 沿革

本園は成田山の經營に係る幼児保育の教育事業であつて前貫首故石川僧正の慈愛により明治三十八年六月一日成田尋常小學校に於て開催され同時に同師本園の園主兼園長となり經營の任に當られた次いで明治三十八年十月地を向臺に卜し文部省技手服部市太郎氏設計同川田初太郎氏工事監督の任に當りて同月廿九日新築工事に着手翌三十九年六月三日盛大なる落成式を舉行した當日は來賓として臨席せられたのは貴族院議員子爵本莊壽巨閣下同子爵板倉勝達閣下其他二百七十餘名であつた大正十三年一月三十一日石川僧正示寂せらるるや荒木現貫首代つて園主兼園長に就任した而して當時の入園兒は其數七十名木村良主任としてこれが保育の任に當つたが其後明治四十年四月より猪狩あひ大正三年十月より山口政子主任として保育の任に當り以て今日に至るかくて園兒の

數も年と共に増加して現在（昭和十八年四月）は百八十名の多數となつた
 創立以來年を重ねる事三十八年明治三十九年三月第一回の保育修了式を行つて以來昭和十八年三月第三十八回の修了式までに修了兒數一千五百四十四名の多きに達す
 又創立以來理事として石川甚兵衛 三橋重郎兵衛（幹事兼任 大正十四年病氣の爲め辭職）關川博道（園醫兼任昭和五年十二月逝去）の三氏の外會計主任として淺井儀助氏（昭和十年三月病氣の爲め辭職同十三年一月逝去）囑託を受けて就任園長を補佐されて來たのであるか昭和十三年四月石川理事は逝去された今は理事制を廢し六和會に移る

三 設 備

本園は成田向臺と稱し三方は緑の森に包まれた三千餘坪の高燥の地に設置された全國稀に見る幼稚園の稱あり保育室は南面し冬期と雖も長時間日光室内に滿つ北に廊下を控へたるは冬は寒さを防ぎ夏は涼風を送る全園緑の芝生にして數へきれぬ樹木は創立第三十八回を迎へて空高く繁茂し幼兒は此樹蔭に夏のあつさを忘る人家に遠さかれるため往來の雜音もなく靜かな落つきを持つ數多い春の花に續いて藤つ、じなど目もさむる美しさを添ふ新緑の頃の眺の又一入庭一面雜草の花開き秋は園内の樹木色とりどりに紅葉して春の花にもまさる趣きを呈す幼兒はこの人工を加へない廣大な自然の庭に求めずして鳥の聲を聞き餘念もなく花を摘みて自然を觀察し幼兒はこの天惠の庭に或は園

内外に固定せるもの移動する數々の遊びの材料に依つて他の追隨を許さない極めて幸福な日常を送る

- 敷地 三、一八九坪 園舎建坪 二五〇坪 遊園 二、九三〇坪
- 園舎は木造平屋で其内譯次の通りである
- 保育室 四（五四坪） 玩具室 一（一、五坪） 遊嬉室 一（四八坪）
- 園長室兼圖書室 一（三坪） 職員室 一（九坪）（保育室に應用） 靜養室 一（四坪）（保育室に應用）
- 小使室 一（七坪） 職員住宅 二（六三坪） 昇降口 電話室 廊下其他
- 附屬建物

四 保育の状況

從來幼稚園に於ては個人教育に重きを置き保育を果して居たのですが國民學校令の改正に依り皇民鍊成の目標が確立され幼稚園も又之に伴ふ心構へも必要となり現在は皇國の道に則つて眞面目な強健の精神生活と正しき躰とに依り幼兒を導く幸にして當園は廣大な地域を有し設備の欄に示す如き環境に幼兒百八十名を收容之を年齢別に組分をし五組に編成職員八名之に當る

入園當初に於ける躰は最も大切にして朝夕の必ず行ふべき心得に付き特に注意を拂ひ容易に外部に發表し得る機習慣性を養ひ又幼兒の年齢相當に物の整頓取扱ひ等將來の基礎となるべき要素に付

き職員一丸となつて其躰に重点を置く朝禮の如きは其最も大切な事項にして近來見るべき成果を結ぶ幼児に時局的認識を深めるため地圖の應用新聞の利用ラヂオの聴取等即ち幼児の了解し得る程度に於て解説を與ふ

大詔奉戴日には天候の許す限り成田山にお詣りして皇軍兵士の武運長久と立派な日本の子供になる様祈願する

又時局に即應して幼児に節約の習慣と一面國家に對するやさしい心の顯はれとして事變以來毎月職員は任意支出幼児は一錢貯金を勵行し之を銀翼献金とし既に意義深き日を選び三回献金をした僅少なこの貯金も幼児の心へ植へ付けらるゝ其結果は長く幼児の美しき精神上の實を結ぶ事となつた

保 育 料

保育料は月額金壹圓五拾錢とし全月欠席者は徴收せず又入園料も現在はなし

五 保育の施設

本園の保育は各種の恩物自然物應用其他園の外内に散在する各種運動具タンク自動車等に依る園外の施設紙芝居人形芝居ラヂオ蓄音機レコードに依る施設等廣大な庭園を利用する時又は雨天或は冬期外遊不可能なる時この種々の變化せる施設に於て幼児の元氣と情操は養はれ將來を持つ幼児の幸福は無限の効果を收む

昭和十七年十一月二十二日川名御院代を始め事業關係の方々をお迎へして第六回そのふ會の總會を當園で開催いたしました

例年この總會の外在園幼児を中心に佐倉習志野下志津方面白衣の勇士を訪問する事がそのふ會の行事になつて居りますが本年は幼児引率の都合上習志野から五十餘名の方々をお迎へいたしましたこの總會に當りました成田驛機關庫では上下を擧げて約二十人近くの樂隊を組織されまして御参加下さる事となり嬉しい事に存じました

午前九時樂隊を先頭に年長幼児之に續きそのふ會員の一部も加はつて京成成田驛に勇士を迎へました

少憩の後樂隊幼児勇士會員と隊伍を整へ成田驛から成田山不動尊參拜へと進んだ

久しぶりにきく勇壯な樂の音幼児の歩調も軽やかに誰人にも胸うつ勇士の姿に全町を擧げて順次に之を迎へ又は見送つた

成田山の參拜を終へた一行は裏通りに出て幼稚園に向つた

園内では總會に付ての行事を終り勇士の到着をまつ此日來賓成田中學校横田校長先生の温情に富む御言葉を頂いて嬉しい限りであつた

やがて勇ましい樂の音は園内にまつ小さい幼児の耳に其他の方々にも傳はつて來たかくて一同は門内に列を正して武勳に輝く勇士を迎へた少憩の後室内遊嬉も可愛ゆき幼児の動作に興深く御覽頂

き後庭園の會食に移つた幼児の全部は勇士に對しやさしい心の印として幼児の身にとり最も大切な貯金箱から合資した幼児の御馳走は煙草やお菓子となつて各兒手づから勇士の座席へお配りする得意になつた幼児の姿にさゝやかな此贈りものを無上のものとして且笑傾けて感謝される勇士の姿に私達は嬉しい限りであつた

かくて樂隊は會食に一人の情趣を添へ天も地もほゝゑむかと思はれた會食後數々の運動競技も皆童心にかへつて勇士は幼兒を伴ひ又は會員の方々と手を携へて御全快近い勇士達の活動も勇ましくかくまでに全快された勇士の方々を祝福した

そのふ會員に依り樂隊を伴奏としてみたら音頭の合同遊嬉も面白かつた又福引の催しも面白かつた集つた方々一人残らず楽しい遊びに移り勇士の方々の歸院の時刻も迫るまゝに幼兒の手になつたさゝやかな手工品をお土産とし御全快近い勇士の御健康を祈念し機關庫の皆様よりの御援助を感謝し楽しい今日の總會を閉ぢた

御院代様を始め來賓の皆様今日御來臨を謝し後の日の思ひ出として今日の記念に撮影す

- 年 中 行 事
- 一月八日 新年 始業式
- 二月十一日 紀元節(梅の節句)
- 三月六日 地 久 節
- 三月二十日 保育修了式
- 四月七日 入 園 式
- 四月二十九日 天 長 節

- 五月五日 端午節句と幼児愛護日
- 六月一日 創立記念日
- 七月七日 七夕 祭
- 十一月三日 明 治 節

六 園 兒 狀 況

イ、修了 兒 數

自明治三十八年度より昭和十七年度に至る

(男) 七八八 (女) 七五六 (計) 一五四四

ロ、本年度入退園及年度末現員調

年 度	性 別		入 園	卒 業	半 途 退 園	死 亡	現 年 度 末 員
	男	女					
十七年度	五〇	五二	三八	三四	七	二	四〇
					九	〇	五四

ハ、昭和十八年四月末日調査園兒數

(男) 七六 (女) 一〇〇 (計) 一七六

ニ、本年度保育修了幼兒數

(男) 三八 (女) 三四 (計) 七二

七 歴代園主、園長、主任

園主園長	主任
石川 照勤	荒木 照定
自明治三十八年四月 至大正十三年一月	自大正十三年現在
木村 良	
自明治三十八年五月 至同九月	
猪狩 亥	
自明治四十年四月 至大正三年三月	
山口 政子	
自大正三年十月現在	

八 職員

職名	氏名	原籍	就職年月
園主兼園長	荒木 照定	千葉縣	大正十三年二月
主任	山 口 政子	德島縣	大正十三年十月
保 姆	若 命 喜美	神奈川縣	大正十年三月
保 姆	瀧 澤 よし	千葉縣	大正七年十月

保 姆	高 田 よしゑ	千葉縣	大正十年五月
保 姆	高 岡 たい	千葉縣	昭和十二年四月
保 姆	須 田 ひろ	千葉縣	昭和十五年四月
代 保	穴 倉 利子	千葉縣	昭和十四年五月
園醫學博士	藤 崎 公道	千葉縣	昭和十六年一月
齒科醫	竹 村 秀壽	千葉縣	昭和十六年四月

九 經費

本園には豫算なるものがない従つて年に依り其金額を異にするも毎年大体大差なく經營す
 昭和十七年度決算額 一二、一八三、九二

成 田 學 園

一 位 置

千葉縣成田町成田四百二番地（電話成田百三番）成田山境内西北に位する老杉鬱蒼、閑雅幽靜の森林中に在る。東京よりは省線（上野、兩國）京成電車（上野、押上）何れよりするも約一時間半、其の成田驛より當園まで一杆、眞に便利の地を占めてゐる。

二 沿革の概要

明治十九年五月二十四日千葉縣下佛教各宗寺院共同事業として千葉町に創設せられたる千葉感化院を其の前身とする。

明治二十一年四月一日成田山の經營に移管せられ、同四十一年三月二十五日現地に新築移轉、成田山感化院と改稱、更に昭和三年三月成田學園と改稱したが、成田山へ移管以來、三池、石川、荒木の三貫首、相踵いで銳意事業の發展に努められ、以て今日に至つてゐる。創立以來五十七年を経過し、少年教護事業としては本邦最古の歴史をもつものである。

其の間皇族の御來園を忝うしたること二回、教育勅語、戊申詔書、國民精神作興に關する詔書、或は青少年學徒に賜はりたる勅語等の御謄本も下附せられ、又年々宮内省より御内帑金の御下賜、

内務大臣、厚生大臣、司法大臣及本縣知事より、多額の奨勵助成の金品を拜受してゐる。
 大正十一年七月十日には龔に出陳した本園一覽に對し、平和記念東京博覽會より賞狀並に銅牌を贈られ、昭和九年二月十一日には恩賜財團慶福會より、本園講堂改増築助成金の交付があつた。
 昭和十一年は創立滿五十週年に相當したるを以て當初開園式の日なる十一月廿八日を卜し、盛大なる記念祝典を舉行し、記念事業の一として「成田學園五十年史」を編纂刊行した。

三 目的

不良行爲を爲し、又は爲す虞ある兒童を收容し、少年教護法に準據して之を保護教養し、其資質の改善向上を圖るを以て目的としてゐる。

四 設備

土地總坪數 三、〇三五坪
 (内) 建物敷地 九七二坪 運動場 三五〇坪
 耕作地 六七五坪
 其他 一、一三八坪

建物 八棟 二九六坪
 (内) 園生宿舍 七五坪 講堂及教室 五一坪
 職員室並に職員住宅 三〇坪 靜養室 九坪
 其他 八三坪

五 歴代園長並びに主任

總院長	長	(千葉感化院時代は總長を置く)	船越	衛、藤島正健、渡邊	暢
院長	長	(昭和三年以前は院長と稱す)	各宗共立時代		
部長	元良	自明治十九年五月至同年二十年四月			
井實禪	自明治二十年五月至同年十一月				
池良俊	自明治二十年十一月至同二十一年四月				
池照鳳	自明治二十一年四月				
池照鳳	自明治二十一年四月至同二十七年五月				
池照勤	自明治二十七年六月至大正十三年一月				
池照定	自大正十三年二月至現在				
副院長	長	(副院長は後主任となる)			
井善四郎	自創立至明治三十一年十二月				
田宥禪	自明治三十三年八月至同年十一月				
友秀松	自明治三十三年十一月至同三十五年二月				
川照和	自明治三十五年二月至同四十二年八月				

大友秀松
大友惟誠

自治三十五年二月至大正十年一月
自大正十年一月至現在

六 現 職 員

(○印は園内常住者)

園主兼園長

荒木照定

主任

○大友惟誠

會計主任

淺井照次

教師

押尾清

教師

○大島正之

保母

○大友靜子

保母

○山田きよ

篤志園醫(一般)醫學博士 藤崎公道

同(眼科)醫學博士 山崎一雄

同(齒科)

新橋利吉

同(整骨)

小倉桂

篤志劍道教師

加勢 胖

七 園 内 生 活

當園は生活を成るべく普通一般の家庭のやうにし度い、つまり園臭味といふか、かゝる處には得て生じ易い何か特別な臭味を出来る丈避け、何でもない家庭、普通の家庭にし度いと努めてゐる。だから特別な規則もない。といつてだらしない生活を意味するのでは勿論ない。一面に亦整然たる

規律生活をさせてゐる。主任夫妻が父母となり、他職員を兄弟とし、園生は皆子供、といふ氣持で大きな家庭を作つて温い家風、自然の慣例によつて園生を訓練し、鍊成し、努めて愉快な朗な生活の中に其の目的を達しようといふことを主眼としてゐる。

唯特に他と異なる所は、不動尊の信仰に重きをおく点である。それは當園教護の大本として教育勅語の御聖旨を奉戴することは勿論であるが、之が實踐躬行の實を擧ぐるは、どうしても信仰の力に由つて之を喚起しなければならぬと信ずるからである。約言すれば、當園の生活は信仰ある規律正しい、普通の家庭生活といふことが出来よう。

試に日課を擧ぐれば左の如くである

午前五時起床

直ちに掃除

午前六時

ラヂオ體操

午前六時三十分

御拜

一、皇室の萬歳を奉祝す

二、大廟遙拜

三、皇軍武運長久祈念、戦歿將兵への感謝默禱

午前七時

朝食

自午前八時至正午

四、成田山不動尊禮拜

五、各自祖先敬拜

午前七時

實科(年長者は五時迄)

午前六時

夕食

學科

正午 晝食

自午後一時至四時

實科(年長者は五時迄)

午後八時

禮拜後就床

自午後六時半至同八時

學科(年長者は九時迄)

午後八時

禮拜後就床

以上の如く定めてあつても、時季によつて時々變更するは勿論、便宜上臨時變更することもある。共に主義 日課中職員生徒はなるべく行動を共にする。當園は此の共にといふことに特に重きを置いてゐる。此の事は特に兩者の親しみを深むるのみならず、教護上最も肝要なる個性の觀察とい

ふことが、子供達の種々の場面に於いて頗るよく出来る便宜がある。

學科。概ね少年教護法施行令に據る教科目にて、午前中三時間乃至四時間（但し雨天又は冬期は午後及びぶことがある）夜間は一時間半、殆ど個人的に教授をなし、特に重きを實用方面に置いてゐる。而して向上の見込ある児童であつて、品行も差支ないと認められた時は、國民學校又は上級の學校へ通學せしめることもあり、現在數名のものが通學中である。

實科。農業、活版印刷、製本及簡易な手工を課す。特に印刷製本は職業教育の一端として昭和四年之を創めたのであるが頗る結果よく、既に之によつて自活をなし居る者も出來た實狀であるが、急激な時局の推移は、園内の實科に於いても農業に最も重きを置かしむるに至つたのも蓋し當然のことであらう。一昨年より運動場を少くして畑となし、其の他園内の空閑地を出來得る限り利用して國家の要請に應へてゐる。

娛樂。遠く親元を離れて來てゐるのではあり、又親がなかつたり、變つてゐたり、兎角家庭的に恵れない子が多いのであるから、娛樂には相當に意を用ゐて、子供達の性狀を圓滿に發達させ、愉快の中に教化の目的を遂げようと努力してゐる。即ち特別に娛樂室を設けたり、生徒圖書室の設備に力を入れたり、又成るべく戶外に連出し、山遊び、魚釣、水泳等の樂しみを味はしむるやうにしてゐるのも其の一端である。

八 成 績

明治十九年開園以來、入園生は三百十九人であつて、歴史の古い割合に、其數の甚だ少いかの感もあるが、これは此の教護思想の未だ普及しなかつたこと、又本園の所在が都會地でなかつた爲めに原因するのは勿論であるが、更により大なる原因は、本園が敢て在園生の多きを欲しないことである。

在園生の多數といふことは、外見上極めて立派であるが、此の教育の性質上からは、決して望ましいことではなく、教育本位にこれを考へるならば、寧ろ少數程効果的であることは明らかなことである。本園は幸に經營上に困難なく、専ら教育的効果を本位に考へ、敢て外見を飾るの必要がなかつた爲め、常に園生の多いことを欲しなかつたのである。

現在としても優に三四十名を收容するの設備はあるが、成るべく二十五名位より多くしないことも此の故である。

以上記載した如く、形式は兎も角實質に於ては、飽くまでも子供本位にして居るから、其の成績は割合に良好である。試に最近の成績をあぐれば左の如くである。

大正十年以降の入園者百八十五名	退園生	一六七名	内	時々交通あり、成績 良好しきもの（一一四名）	成績良好なりしも、死亡したるもの（一六名）	交通なく、成績 不明憂慮中のもの（三七名）
	現在生	一八名				

九 本年度關係事項

一、本年度入退園狀況

前年度繰越園生	一七名	本年度入園生	一三名
本年度退園生	一二名	現在園生	一八名

二、御下賜金及獎勵金等拜受並に寄附金

官内省御下賜金	金 壹 封	厚生省助成金	金九百八拾圓也
司法省獎勵金	金壹百五拾圓也	千葉縣助成金	金五拾圓也
寄附金	金叁百貳拾圓也		

内 譯

金貳百八拾圓也	岩崎 家 殿(東京)	金拾圓也	三上 弘 殿(成田)
金拾圓也	勝田金太郎殿(成田)	金拾圓也	鳥居俊一殿(成田)
金拾圓也	重田兼雄殿(成田)		

外に平澤光殿より園生の理髪を毎月一回奉仕せられてゐる。

三、特殊事業

1、臨海鍛鍊。夷隅郡大原町澁田保育園々長松崎とし子氏の好意により、同園の一部を拜借し八

月一日より全十二日迄臨海鍛鍊を實施し非常に得る所があつた。

2、職員的光荣。篤志園醫如春堂病院院長藤崎公道氏は、二月十一日紀元の佳節に於て、社會事業後援功勞者として財團法人千葉縣社會事業協會會長川村秀文閣下より表彰せられた。

同日主任大友惟誠は多年社會事業に盡瘁したるの故を以て恩賜財團慶福會總裁閑院宮載仁親王殿下より選奨の光榮に浴した。

十 入退園

入 園 近來専門家の間に、早期發見、早期教育といふことが盛に唱へられるが、之は長い經驗に徴する迄もなく、是非左様ななければならないことである。此の位は子供としてあたりまへだ、今になほるだらう位で放置して、次第に嵩じて所謂病膏盲に入つてからでは、どんなに大さわぎをしても困難のみ多くして効果は伴はないものである。豫防の一オンスは治療の百ポンドにまさるといふ、不幸にして子供の不良傾向を發見したなら、先づ相談することである。必しも入園せしめよとは言はない。十分御相談につて善處し、其の子の幸福、延いて邦家の發展を念願するものである。

入園を希望する向は、先づ御來園を願うのが近道であるが、遠方の方は詳しい手紙に、學校の成績表を添へて御相談下さるも差支ない。

入園年齢を満七才以上、十六才迄、在園費を月貳拾圓と定めてあるが、之等も御相談によつては如何様にも出来る事である。但し不良程度のあまりに深きもの、低能の著しきもの、不具者、病者は入園を謝絶してゐる。

退園。年少の中に入れ、當園で見込のつくまでお預けになれば、大抵は其の目的を達し得るのであるが、當園の未だ反對するにも關らず中途にして引取することは、往々にして逆戻りの因となる。在園中は固より退園時も退園後も、こちらと保護者との十分なる連繫協力は甚だ必要なことである。

十一 經費並に基本金

經費。本園には嚴密なる豫算はないと云ふ方が事實に近い、固より大體の豫算を定めて置き、右を標準として支出をなし、嚴に濫費を防ぐ事は申す迄もないが、實際には必要に重きを置き、必要な以上は實費を支出するのに躊躇しない、従つて亦豫算内だからといつて必要もない費途に無理に消費するやうなことはないのは無論であり、毎月定日本園經費の金額を新勝寺會計主幹から領收し、之を支出する慣例であるが、會計上園長及主幹より未だ曾て一言の注意質問を受けたこともない。全く深き信頼を與へて、濫りに細小の監督を加ふるやうなことはないのである。此の結果は自然、局に當る者に對し、自制心を與へ、求めないで總ての節約が行はれ、其の効果は慥に豫算を限定する以上であつて更に頗る便利を極めて居る。左に記載するは昭和十七年度の決算である。

歳入	歳入	臨時部	三、八八九・六九
歳入經常部	一五、六七二・六〇	臨時部	三、八八九・六九
合計	一九、五六二・二九		
歳出	歳出	臨時部	三、五八五・八七
歳出經常部	一二、六八四・六〇	臨時部	三、五八五・八七
合計	一六、二七〇・四七		
歳入歳出差引残高	三、二九一・八二		

基本金。明治四十一年三月、本園を千葉町より成田町へ移轉して以來、前掲の如き官公衙の奨勵助成金及び各篤志家より本園へ寄附せられた金員を蓄積して、基本金を作るの方針を採り、目下着々實行中である。しかし本園は自ら進んで一般より寄附金を受けようとするの方法はこれを探らず、専ら篤志家の同情、義捐に任せて來たのであるが、現在金參萬五千八百五十圓と、有價證券千九百參拾圓を蓄積するに至つてゐる。

附心の病院

世の識者と目される方の中にさへ、未だ此教育の効果に就いて御存知なく、「此癖ばかりはどうしたつて直りつことはない」といふやうなことを言はれる方がゐるのは、眞に遺憾至極の事である。

手に手を盡してもよくならない者もそれはある。しかし身體の病氣に於ても同じ事、如何なる名醫が熟練せる技倆、得難い妙薬を用ゐても癒らず、終に死に至る者もある。身體の病氣に先天的のものがあつて、傳染性があり、急性があり慢性があるのと同様、此不良性癖にも種々、類があり程度がある。随つて早く直る者もあり、ひまとる者もあり或は終に矯正其効を奏しない者もあるのは事實である。實に此教育は此不良の性癖を矯さうと努力するのであるから、謂はゞ心の病院と云ひ得よう。唯依頼人の心理状態が甚しく違つてゐる。病院に入院した場合、父兄は固より親戚知人に至る迄、非常な心配の下に屢見舞つては、あらゆる手を盡すのであるが、不良癖を認めた場合、つまり身體よりも重んぜらるべき筈の心が不健康になつた際、父兄は案外平氣で放任し又は彌縫隠蔽をこれ事とし、最後に止なく入院せしめた場合も、減多に見舞ふこともなく、中には頼みつばなしで在園中一度も願わない者すら珍らしくない。親戚知人は之を知るも己が身内、己が知合の者なることを恥ぢ、敢て見舞はんともせざる事がそれである。かゝる状態其他に因て、此教育の困難は言を俟たない。普通教育畑から轉じた教護院職員の述懐に、此子供一人を教護する勞苦は、國民學校生徒三十名より五十名を扱ふに匹敵する、と異口同音に言はれるのを見ても明である。さりとて此教育の効果を疑ひ、深く探究することもなく頭から駄目ときめてかゝるは早計も甚しいものである。事實は立派に其効果多大なるを證明してゐる。

國家が少年教護法を制定して、一縣必らず一ヶ所以上の少年教護院を設けしめ、又少年教護委員を任命して此教育を奨励しつゝあるのも、蓋し當然のことであらう。

成田圖書館

一 沿革

本館は成田山新勝寺の經營に掛り、明治三十五年二月一日を以て開館せられた。即ち、これより先き前貫首石川僧正が明治三十一年歐米視察の途に上られるや、列國の風潮に鑑み、圖書館事業の急務なるを悟られ、同三十三年歸朝後直ちに本館を創立せられたものであるが、館主は取り敢へず當時偶々新勝寺境内の現本館所在地に建築されてあつた一府三縣農水産物品評會々場跡の建物を利用して、これをその儘圖書館設備に充てることとしたのである。

斯くて創業に當り、從來新勝寺に所藏せられてゐた佛書、漢籍約七千冊、これに石川僧正所藏の新刊書約七千冊と、洋書五百餘冊を加へたる約一萬五千冊を藏書として開館し、尙ほ更に成田町石川愛一郎氏、三橋金太郎氏、鳥居直哉氏、大野市平氏、小川毅應氏を始め、その他の有志者より多數の圖書を寄贈され、同年五月までにその數一千餘冊を増加した。然るに當時は書庫もなく、目錄も具備せず、只同建築物の四周に書架を並べ、閱覽者の選擇に任せ、只一人の事務員にて事を運ぶといふ素朴な開架式であつたが、その後漸次閱覽者の増加と共に圖書も増加し、職員も増加となり、同三十五年六月には和漢書分類目錄完成、次いで同三十八年二月より館外貸出を開始、爾來年を追つて藏書數も益々増加したので、書庫の必要を感じ、同三十九年三月書庫新築に着手、同四十年

六月九日これが落成式を舉行、この日を以て本館の記念日と定めた。

そのうち藏書も同四十一年には四萬冊となり、又閱覽方面に於ても同四十四年一月より夜間開館を実施して、一層閱覽者の便益を計ることゝなつた。

然るに大正十三年には、不幸にして館長石川僧正が示寂せられたが、現貫主荒木僧正その後を襲つて直ちに館長に就任、銳意館勢の發展に留意せられ、時代の趨勢に順應して圖書備付の充實、郷土資料の蒐集を始めとして、貸出文庫、團體貸出、印刷物の刊行、各種展覽會の開催等を行ひ、藏書數も十二萬餘を算し、閱覽數も増加して一日平均百五十餘名に上るに及び、現代的公共圖書館としての機構内容を茲に具足し得るに至つた。

この間事務主任たる主事の交代は四回に互つてゐる。即ち初代の主事は高津親義で、創業補佐に功績尠くなかつたが、昭和二年十二月勇退して顧問(同十一年十一月卒去)となり、その後小林力彌高井觀海の兩主事を経て、同九年には司書成田善亮主事に昇格、以て今日に至つてゐる。

二 位置、及び建物設備

本館所在地は、成田町成田三百十二番地で、成田山東南麓にある景勝地の中央に位し、東は成田高等女學校に、西は成田山本堂に隣し、南に成田町市街地を控へ、北には丘陵地帯の成田山公園を負ひ、翠滴る老樹を以て蔽はれ、冬は暖かに夏は涼しく、圖書館として好適の地を占めてゐる。

この敷地千二十八坪。

建物設備は、

閱覽室(木造二階建)延七十七坪、目錄室(木造)六坪、事務室(同)九坪、宿直室(同)四坪、使丁室(同)三坪、休憩室(同)三坪、應接室(煉瓦造)六坪、書庫(同三階建)延九十坪、雜誌書庫(木造)六坪、兒童室(同)十四坪、住宅その他附屬建物(同)百二十六坪餘。

閱覽室はこれを適當に區分し、現在階上を特別、及び婦人室に、階下を一般、及び新聞の各室に指定してゐる。

このうち書庫には防火用鐵扉を備へ、堅牢安全な設備を施してあるが、逐年藏書の増加に伴ひ、圖書充滿して、増築の必要急なるものがある。

三 藏書

本館圖書は開館當時は、前述の如く約一萬五千冊に過ぎなかつたが、爾來年二三千冊宛の割合を以て増加し、昭和十八年三月末現在では次ぎの通りとなつてゐる。

(和漢書) 一二〇、七七〇冊 (洋書) 五、一六四冊 (計) 一二五、九三四冊

右藏書中、佛書の二萬餘冊、就中密教關係書の豊富なることは特徴としてよいと思ふ。又白鳥博士の厚意に據つて得たる朝鮮本の一部等は、本館の稀觀書として聊か誇りとするものである。尙ほ

又現存せる諸本中最古の寫本たる住吉物語、慶應以前の版本、古徳碩學の手澤本、書入本、並びに洋書に於ては一千五百年代の古刊本等の稀觀書がある。更に所藏の文庫としては、望洋文庫(石川僧正文庫)、依田文庫(依田學海文庫)、栗園文庫(足立栗園文庫)、石川文庫(石川鴻齋文庫)、木村文庫(木村泰賢博士文庫)、白鳥文庫(白鳥庫吉博士文庫)、池田文庫(池田僧正文庫)、大槻文庫(大槻快尊師文庫)等があり、これらは特殊の關係で寄贈又は移讓せられたものであるが、以上文庫に加へて近くに幕末の異色ある國學者鈴木雅之の遺著撞賢木外大部分未刊の自筆稿本八十餘冊の寄贈を受けたことも亦特記すべきで、本館は凡てこれらの稀書の保管に任じつゝある。

而して本館の現總藏書數を試みに本館所在地成田町の人口に比較すると、成田町民一人當り平均十一冊強となり、又成田町戸數に割當れば、一戸當り平均五十五冊強となるのであるから、地方文化振興の聲が頻りに唱へられる今、本館の存在は又この点からも意義付けられると思ふ。

尙ほ雜誌は新聞を合して、二百餘種の備付があるが、このうち雜誌は年々合冊製本して一般圖書と同様の取扱をもなしてゐる。殊に佛教雜誌に至つては、明治後半期より蒐集してあるので、近時遙々東京方面よりする専門學徒の來館者が日に多きを加ふるに至つてゐることは誠に喜ばしい。

四 目 録

本館作製の目録は大別して、來館者の爲めのカード目録と、外部にあるものに對する印刷目録と

の二種となり、印刷目録は目下第二篇まで刊行してゐる。

本館備付のカード目録は「分類」と「書名」とであるが、實際上使用率の多いのは分類目録の方である。更にこれを時代別に見る時は、舊きものより新しきものゝ方が利用されてゐる。分類方法も大正二年以來は舊來の八門分類を廢し、新制の十進分類に改めたるを以て、的確精密度を増し、檢索上の利便も新しきものゝ方に加はつてゐること勿論である。

次に、新着圖書の紹介方法としては、整理済みの圖書を閱覽室の新刊書架に排列公開し、そのうち主なるものは館報に登載してゐる。

五 施 設

本館は公共圖書館であり、隨つて圖書閱覽以外に、附帶施設として社會教育的事業をも行はなければならぬ筈であるが、當山に於てはこの方面の施設として、別に新更會があり、こゝで青年並びに一般成人の社會教育や修養を目的とする講演、講習その他種々の事業を實施し、更に巡回文庫等の仕事も行つてゐるので、本館の附帶事業とすべき社會教育施設としては、専ら讀書獎勵に關する施設だけに止まつてゐる。今その施設の主なるものを擧ぐれば左の通りである。

團 體 貸 出

四隣町村青年團、又はその他團體に對して、希望の圖書を一纏めにして貸出してゐる。

國民學校との連絡

讀書の鼓吹といふことは、成人間にこれを行ふよりも、寧ろ幼少年時代より書物に親しむ習慣を涵養するの要あることは、今更言を俟たない事柄である。據つて本館にては國民學校と連絡し、常に各學級の兒童を適宜本館に收容して館内讀書をなさしめ、併せて圖書館利用の指導をなしつつある。而してこれが爲めには別館の専用兒童室を設け、この室に於て兒童圖書を開架式によつて直接閱覽せしむることとしてゐる。

婦人のための家庭配本

圖書館に於ける閱覽者中、婦人の閱覽者が男子に比して少數であることは、一般的に見る傾向であるが、家庭教育の衝に當り、一家の主婦として將又母として立行くべき婦人がかくの如き状況にあることは憂慮すべきで、この缺陷を幾分にも匡正しようとする目的を以て、昭和九年十月より「家庭配本」と稱し、成田町内の希望家庭に各週毎に本館より圖書を直接配達して、各家庭の婦人が家庭に居ながら讀書の便益に與かり得る施設を設け、これが實施に當り、年々その効果の尠からざることを認めてゐる。

讀書會

昭和十八年一月より、成田町を中心とする町村青年間に讀書會を結成せしめ、本館藏書のうち適當なるものを選択讀書せしめ、毎月一回讀書會例会を開き、會員各自の時局認識、智能の啓發向上

に資せしめてゐる。

佛教雜誌論文索引編纂

本館所藏の佛教雜誌利用を一層容易ならしむる爲め、目下一々該雜誌の内容調査に當り、これが索引の編纂をなすべく努力中である。

刊行物

新着圖書の通知、及び本館所藏の近刊佛教關係雜誌主要論文目錄を始め、新刊良書解題、讀書獎勵、本館消息等に關する記事を掲載する「成田圖書館報」を隨時刊行、關係各方面に頒布し、以て研究者及び一般讀者層の便益を計りつつある。

六 閱覽狀況

本館々内閱覽は無料にて、一般閱覽者が利用する外、成田中學校、及び同高等女學校の生徒參考書利用も多く、更に特殊傾向として近年佛教書並びに同關係雜誌を研究する遠來の學徒が増加し來れること前述の通りであるが、次ぎに一般閱覽者の種別を見るに、從來男子に比して婦人は極めて劣勢であつたが、別掲の如き家庭配本を實施してより斷然面目を一新した傾きがあり、又帶出及び館内に於ける婦人閱覽者も年を逐ひ増加してゐる。

又、館外貸出總數も、個人としては現在六百餘名を算し、これ亦累年増加の傾向にある。

昭和十七年度 閱覽統計 (開館日數三二六日)

圖 書 閱 覽 狀 况		
一日平均閱覽者數 一四〇人	分類別	百分比
	分類別	百分比
一日平均閱覽冊數 一七一冊	職業別	一日平均
	職業別	一日平均

分類上ヨリ見ル狀況

文學・語學	五五・六
歴史・傳記・地理・紀行	六・八
理學・數學・醫學	六・三
宗教・哲學・教育	五・七
政治・法律・經濟・軍事	三・九
總類	三・一
藝術・踏藝	二・七
社會・風俗・娛樂・運動	二・七
産業	一・三
工學・交通・通信	一・三
兒童	一〇・六
計	一〇〇・〇

職業上ヨリ見ル狀況

學生・生徒	四五・七
其他	一五・二
商工業	五・二
農水産業	五・〇
銀行會社員	三・九
宗教家教員	二・六
官吏軍人	〇・五
婦人	四五・三
兒童	一六・九
計	一四〇・三

七 歷代館長、顧問、主事

本館の歴代館長顧問主事は左の通りである

歴代館長

- 石川 照勤 (自明治三十四年一月十一日至大正十三年一月三十一日)
- 荒木 照定 (自大正十三年二月一日至現在)

歴代顧問

- 高津 親義 (自昭和三年一月一日至同十一年十一月二日)
- 今澤 慈海 (自昭和十一年五月二十八日至現在)

歴代主事

- 高津 親義 (自明治三十五年六月一日至昭和二年十一月三十一日)
- 小林 力彌 (自昭和三年五月四日至同四年四月十七日)
- 高井 觀海 (自昭和五年五月五日至同六年四月十九日)
- 成田 善亮 (自昭和九年一月一日至現在)

八 職員

昭和十七年三月末現在本館職員は次ぎの通りである

館主兼館長	荒木照定	司書	岩館衛
顧問	今澤慈海	囑託	木村莊太
主事	成田善亮	助手	八木しげ子
司書	小川益藏	同	寺内清
同	武士田文哉	同	松岡照子

九 経費

本館昭和十七年度決算は左の通りで、これを成田町人口に割當ると一人當金貳圓強となる。

昭和十七年度決算額 二一、四六三、八四

職員給及び雑給	一一、二四六、三〇
圖書費	六、八一、八三
需用費 其他	三、一四五、七八
營繕費	二五九、九三

一〇 録事

- 四月十八日 空襲警報發令。京濱地方に敵機飛來
- 四月二十日 館員岩館衛、武士田文哉を司書に、綿貫實を司書補に任す。
- 五月十六日 千葉縣圖書館協會總會を野田町興風會圖書館に於て開催、席上館長親下は本館經營及び本縣圖書館協會に盡した功績により感謝狀を授與された。
- 五月十九日 日本圖書館協會總會を帝室博物館講堂に開催、同會創立五十週年を期とし、成田町長三橋金太郎氏は本館外護者として、館長親下、成田主事、小川司書は事業功勞者として表彰の光榮に浴した。
- 六月九日 記念日。印旛沼畔へ全館員強歩行。
- 七月三日 成田國民學校五年生二百五十餘名來館、國語讀本中の「圖書館」課につき館員より受講。
- 七月十四日 新任川村千葉縣知事事業視察。
- 七月二十日 六月十九日附を以て大藏大臣より「家屋稅法施行規則第二條第四號ノ規定ニヨル」私立圖書館に指定せられたる旨の公文書來着。
- 八月一日 成田高女生徒三十名館庭（掃除）に勤勞奉仕。

八月二十日—二十二日 千葉縣、縣圖書館及圖書館協會共同主催の圖書館講習會を海上郡瀧鄉村龍

腹寺に於て開催、成田主事、小川司書受講。尙小川司書は目錄法につき講義をなす

九月十日 綿貫司書補應徵。

九月二十三日 館長猥下は日本圖書館協會より名譽會員に推薦せられた。

十月一日—十日 曝書及調査。

十月二十日 日本圖書館協會へ圖書優先配給の申込をなす。

十一月七日 文部省圖書館講習所生徒二十六名來館。

十一月十二日 縣主催「讀書施設擴充協議會」を本館に於て開催、印旛郡下青年學校關係職員及町村長等約五十名來會す。

十一月二十二日 日本圖書館協會書誌學部々長幸田博士以下會員三十一名來館。階上に稀觀書を展觀す。

十一月二十五日 古典保存會七條愷氏等來館、古寫本「住吉物語」の全卷撮影をなす。

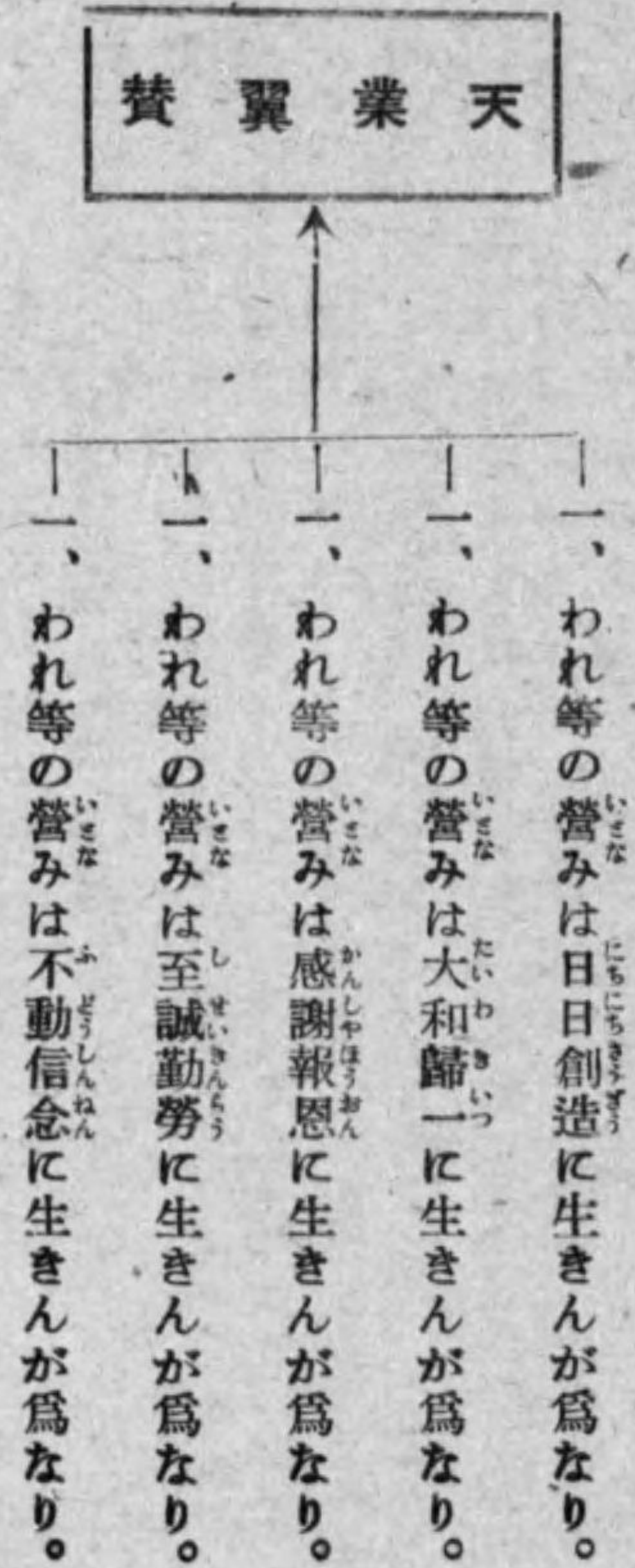
二月十三日 銅鐵類の供出。

二月二十三、四日 縣主催の讀書會指導者講習會を千葉市東禪寺に於て開催、岩館司書受講。

三月七日 豫て結成準備中の讀書會發會。

新 更 會 網 領 會

新 更 會 網 領



右五條われ等は相共に歡喜奉行せん

新更會歌

(部 子 男)

一、常磐の翠滴りて
 曉淨き成嶺に
 そより立ちたる會館の
 薨に光り映えわたる
 我等の團結新更會

二、世に魁けし旗標
 成人教育基礎固く
 皇道精神高揚の
 氣魄に満ちて搖ぎなし
 我等の團結新更會

三、智徳の練磨重ねつゝ
 道にいそしむ春秋の
 行事に理想偲はるゝ
 翠き固めを結びたり
 我等の團結新更會

四、杜に籠りし鐘韻の
 清爽の氣を湛へたる
 胸に誓し使命もて
 世路の波濤を乗り切らむ
 我等の團結新更會

(部 子 女)

一、濃き常磐木に圍まるゝ
 薨に光映ゆるなり
 成田の岡に呱呱のこゑ
 あげし我等の新更會

二、叡智の鏡淨めつゝ
 思想の波を乗り切らむ
 皇道精神顯揚の
 旗をかざせる新更會

三、清く育ちし少女子の
 矜持を高く抱きつゝ
 婦徳を磨き精進の
 道に輝やく新更會

四、杜をわたれる鐘の音を
 胸に湛ふや爽やかに
 誓ひも固き使命もて
 進む我等の新更會

一、位 置

新更會は成田山境内の北端、公園内に在りて、根本名川流域を一望の裡に瞰下し、土地高燥成人教育の道場として最も相應しき所也。

二、沿 革

現成田山貫主荒木照定大僧正猊下夙に社會教育の必要を痛感、檀家總代及有志と相諮り、遂に昭和三年六月五日之が創立を見、高津親義、佐々木祖門、澤田五郎を経て現主幹神崎照惠に至る。同六年三月「新更」誌を發行し、會員七千餘名の連絡指導機關となす。同六年六月六日新更學院を開設し直に生徒の教育をなす。同八年五月縣より認可の指令を受く。同十年三月合宿道場弘誓寮完成す。同十五年十月中央教化團體より選奨状を受く。同十六年四月より時局下社會情勢に順應するの意味に於て一切の催物等を中止し、五十餘の支部指導と新更學院の教育とに専念致すこととせり。

三、趣 旨

大正の末より昭和の初にかけて自由平等、共產赤化等の外來思想滔々として浸入し、國內は人心の不安、思想の動搖甚だしく、心ある者をして全く邦家の前途を憂慮措く能はざらしめ、「建國精神

の顯揚」と「宗教的信念の必要」とを絶叫せしめたり。而して單なる模倣を捨て創造的精神の涵養を希ふに至る、茲に即ち新更會組織の理由こそ存するなれ。故に本會に於ては徒らに宣傳や形式に捉はるゝことなく、自ら靜思反省、實踐躬行を専らにし現社會の純化淨化をなさんとするものなり。

四、使 命

明治維新以來歐米の物質萬能の文化は勢凄じく移入され、國民亦多大の富強を致せるもその反面に於て、日本本來の思想は少からず動搖を來たし、日本國內に於ける眞の姿は失はれんとせり。此の時、今上陛下朝見式の際の「創造ニ勗メヨ」の御詞こそ、日本國民の齊しく現代果た將來に於て嚮ふべき道を御示しなされたるもの也。茲に於て建國の精神に立脚し、國民意識を昂揚し、以て肇國の大理想を達成せしめんとす。之れ本會使命の第一なり。

次に從來日本の社會實狀を歐米の文明開化とは種々の點に於て格段の庭徑が存する、之をして融合調和せしむる爲には大なる努力を要す。即ち採長補短以て相互の理解と感情の融和とを圖ること肝要なり、之が爲には教育の力に俟つより外なきも、現在の學校教育によるのみにては到底不可能であり、満足をなし得ず。茲に於て更に成人教育、社會教育を行ふことにより、迅速的確に實際生活

の向上を期し以て新文化の建設と創造に努力せんと欲す。之れ本會使命の第二也。

更に人心の不安動搖を除き、光明を仰ぎ而して國民をして自己の成すべき所に邁進する爲には宗教的信念に住し、信仰生活を營むより外に途なく、茲に於てその指導をなさんとすること之れ本會使命の第三也。

以上の三大使命を果す爲に縦の基本機關たる學校教育に對して、横の補助機關として成人教育社會教育たる新更會を創設するもの也。

五、會 則

第一條 本會ハ皇國傳統ノ健全ナル思想ト鞏固ナル宗教的信念トノ下ニ國民精神ヲ作興スルヲ以テ目的トス

第二條 本會ハ新更會ト稱ス

第三條 本會ハ第一條ノ目的ヲ達成スル爲メニ左記事業ヲ行フ

- 一 合宿講習會ノ開設 會員相互ノ精神的團結向上ノ爲ニ指導者ト會員トノ寢食ヲ共ニスル講習會ヲ毎年二回以上開催ス
- 二 成人講座ノ開設 會員ノ研究修養ノ爲ニ隨時講演會ヲ開催ス
- 三 修養講演會開催 會員及一般公衆ノ爲ニ隨時講演會ヲ開催ス

- 四 新更學院ヲ設置經營ス
 - 五 郷土史料ノ陳列 史料中文書ニ屬スルモノ又ハ歴史技藝ニ關スルモノヲ努メテ蒐集シ新更會館ニ陳列シテ會員及公衆ノ閱覽ニ供ス
 - 六 雜誌及圖書ノ刊行配布 本會月刊雜誌「新更」及其ノ他ノ圖書ヲ刊行配布ス
 - 七 圖書閱覽貸出 及成田圖書館利用ニ關スル各般ノ施設
 - 八 會館ノ貸與 本會ノ目的ニ適合スル各般ノ集合等ニ本會館ヲ貸與ス
 - 九 其ノ他第一條ノ目的遂行ノ爲ニ必要ナル事業ヲ行フ
- 第四條 本會ノ會員ハ左ノ三種トス
- 正會員 成規ノ手續ヲ經テ入會シタルモノ
 - 贊助會員 篤信者ニシテ本會ノ目的ヲ翼賛スルモノ
 - 名譽會員 高僧名士ニシテ本會ノ特ニ推薦シタルモノ
- 第五條 本會員タラントスルモノハ會員一名以上ノ紹介ニ依リ理事會ノ承認ヲ要ス
- 第六條 本會ニ左ノ役員及職員ヲ置ク
- 一、總裁 一名
 - 一、會長 一名
 - 一、理事 若干名(内二名ヲ常任理事トス)
 - 一、參事 若干名
 - 一、評議員 若干名
 - 一、顧問 若干名
 - 一、主幹 一名
 - 一、主事 主事補 若干名(内一名ヲ首席主事トス)
 - 一、書記 若干名

- 第七條 總裁ハ成田山貫首ヲ推戴ス、會長、理事、參事、評議員及顧問ハ總裁之ヲ依囑ス 但理事ハ新勝寺檀徒總代人及新勝寺内ヨリ若干名ヲ以テ之ニ充ツ 主幹ハ總裁之ヲ任命ス
- 第八條 會長、理事、參事及評議員ノ任期ハ二ケ年トス
- 第九條 總裁ハ本會ヲ統率シ、會長ハ會務一切ノ處理ニ任ズ、理事ハ會長ヲ補佐シテ會務ヲ分掌ス、參事、評議員、顧問ハ總裁ノ諮問ニ應ズ主幹及主事ハ總裁及會長ノ命ニ依リ事業ヲ遂行ス
- 第十條 本會ノ經費ハ寄附金ヲ以テ之ニ充ツ
- 第十一條 本會々員ニシテ本會ノ體面ヲ汚損シ又ハ本會ノ目的ニ違背シタル行爲アリタル時ハ理事會ノ決議ニ依リ除名スルコトアルベシ
- 第十二條 本會々則ノ改正ハ評議員會ノ決議ヲ經ルヲ要ス
- 第十三條 本會ハ會員二十名以上ニ達シタル地方ニ支部ヲ置ク
- 支部規則ハ本會々則ニ準ジテ各支部毎ニ之ヲ定メ支部長及支部幹事ヲシテ支部ノ會務ヲ處理セシム支部長ノ任命ハ總裁之ヲ行フ
- 第十四條 支部長ノ職務權限ハ本會評議員ニ準ズベキモノトス
- 第十五條 年一回以上總裁ノ名ニ於テ全國各支部ノ支部長會議ヲ招集ス但シ必要ニ應シ地方別ニ召集スルコトアルヘシ

第十六條 本會ノ本部ヲ千葉縣印旛郡成田町成田山公園内新更會弘誓寮内ニ置ク

六、役員及職員

- 總裁 成田山貫主 荒木照定
- 會長 三橋金太郎
- 理事(○印常任理事) ○諸岡勝太郎 藤崎公道
- 大野市平 川名照通 ○浅井照次
- 參事 諸岡市郎左衛門 渡邊和一 鈴木民治郎
- 評議員 三橋金太郎 山内平治郎 諸岡勝太郎
- 小野寺弘 關川藤右衛門 藤崎公道
- 川名照通 諸岡市郎左衛門 渡邊和一
- 大友惟誠 成田善亮 横田泰邦
- 木内喜右衛門 萩原村次 小林照勳
- 鈴木五兵衛 飯田照戒 古川與一郎
- 藤本三郎 加藤精彦 神崎照惠
- 顧問 高井觀海 兒玉九十 宮崎廣
- 土井豐 三橋金太郎
- 藤崎源之助
- 浅井照次
- 土井豐
- 古矢大助
- 鈴木民治郎
- 今澤慈海
- 大野市平
- 大木健
- 鈴木勇助
- 鈴木迪彦

- 主幹 神崎照惠
 - 主事(○印首席主事) ○石橋廣
 - 加勢 胖 鈴關宥俊 湯淺豊
 - 主事補 海瀬三郎
 - 書記 田代天津 加藤ふみ
 - 囑託 鶴見照碩 齋藤理平
- (昭和十八年六月十日現在)

七、設備

- 敷地坪數 一、八〇〇坪
- 建物坪數 五七六坪
- 會館(木造二階建) 二四七・五坪 (舊千葉縣物産陣列館建物を改造したもの)
- 【階上は講堂、講演、講習會に使用】
- 【階下は展覽會等に使用】
- 弘誓寮(木造二階建) 三二八・五坪
- 此の建物にて合宿講習會・特殊講習會・研究會其他の行事を行つてゐる。各室内譯左の如し。
- 階上 靜觀室(四十九疊半) 會議室 洋間(二十四坪) 同日本間(二十九疊) 總裁室
- (十七疊半) 應接室(九坪) 講師室(十二疊半) 宿直室(八疊) 圖書室(四坪)
- 醫務室(十四疊)

階下

合宿室三(六十六疊半) 食堂(三十八疊半) 事務室(十九坪二五) 炊事室(十二坪)
 小使室(十一疊) 洗面所(八坪) 浴場(六坪)
 新更學院教室 二二・五坪

八、新更會支部 (昭和十八年三月現在)

支 部 名	支 部 名	支 部 名	支 部 名
豊久彌船中根大更阿富遠	住 住 (印 旗)	大 大 (印 旗)	岩 井 (安 房)
須	街 (印 旗)	大 須 (香 取)	平 群 (山 武)
山 里 波 科 賀 郷 郷 穂 富 住 住	大 須 (香 取)	東 文 (香 取)	千 田 (山 武)
(印 旗)	大 須 (香 取)	滑 橋 (香 取)	平 代
(印 旗)	大 須 (香 取)	阿 河 (香 取)	里 田 (山 武)
(印 旗)	大 須 (香 取)	蘇 河 (香 取)	上 里 (香 取)
(印 旗)	大 須 (香 取)	郷 蘇 (香 取)	岡 上 (海 上)
(印 旗)	大 須 (香 取)	勝 郷 (山 武)	貝 岡 (山 武)
(印 旗)	大 須 (香 取)	沼 勝 (山 武)	東 貝 (山 武)
(印 旗)	大 須 (香 取)	津 總 (山 武)	芝 東 (山 武)
(印 旗)	大 須 (香 取)	公 大 運 日 南 阿 滑 橋 東 大 須 森	像 芝 東 貝 岡 上 里 田 平 岩
(印 旗)	大 須 (香 取)	津 總 (山 武)	治 像 芝 東 貝 岡 上 里 田 平 岩
(印 旗)	大 須 (香 取)	永 宗 横 成 片 豊 海 豊 千 平 岩	(印 旗)

九、施 設

- ① 本部關係
 - 1、會議理事會、支部長會(年一、二回)、評議員會(隔年)、職員會(月數回隨時)
 - 2、海軍時局展覽會、會館に於て四、五月開催
 - 3、出征會員家族慰問、農繁期に全支部に行ふ。
 - 3、巡回文庫、現在約三千冊を有し、毎年新刊書を購入す、支部並に陸軍病院へ順次發送す。
 - 5、出版物、創立以來の「新更」誌は時局下統制令により昭和十六年二月より廢刊、現在は年四回新更叢書なる小冊子を刊行す。
 - 6、定期女子實務講習會、全縣下女子青年、三泊四日、七、十一、三月の三回開催、合宿許可百三十名希望者甚だ多數
 - 7、定期、男子中堅幹部講習會、全縣下男子青年、三泊四日、二月開催、合宿許可七十名、青年より三十才前後の翼賛壯年幹部多數を占む。頗る真剣。
- ② 支部關係
 - 1、講演會、合計 四十九回、一回の聴衆平均約四〇〇名、此の中に數支部聯合の大講演會をも含む、和波中將 坂西少將 松島大佐 廣瀬大佐 及 松本淳二 木内キヤウ 宮城タマヨの諸先生、其他。

- 2、講習會 合計四十五回、平均約六十名 印牧舞踊 高槻料理 塩田禮法 奥田足袋 永野農産加工 其他
- 3、合宿講習會 弘誓寮の外に支部へ出張しても行ふ、合計 三十一回、一回約六十名、概ね一泊二日
- 4、映画會 毎月數箇支部づつ順次開催、映画配給社、海軍横鎮、大政翼賛會等より、合計 三十五回、觀衆平均千名以上。
- 5、部落會、役員會、支部總會、其他 合計 四十七回、一回平均四十七名、本部長出張指導をなす、
- ③ 時局對應施設
- 1、海軍時局展覽會開催 (前條掲出)
- 2、大東亞戰完遂講演會 目的に副ふべく講師の選擇をなす
- 3、出征會員家族慰問 九、十月身代御札及見舞品を携行し、本部長親しく慰問をなす、尙、英靈となられし會員に對しては町村葬の際、必ず本部長職員參列弔意を表す。
- 4、巡回映画會 出征者家族に對して必ず招待す、縣下陸軍病院、飛行場等に慰問をなす。
- 5、陸軍病院慰問文庫 縣下各病院。
- 6、演習部隊或は參詣軍人、白衣の勇士に對し接待す。

- 7、婦人實務講習會 銃後婦人に對し戰に勝つために。
- 8、部落常會指導 國策順應、戰爭完遂、幻燈、紙芝居等携行。
- 9、出版物 時局認識を深めるやう著者選擇。
- 10、會場貸與 厚生省、遞信省、衛生課、勞政課、産業報國會、等の合宿、或は縣内、郡内各種團體會合等に成可く便宜を與ふ。

十、新更學院

- 1、設立趣旨 教育勅語に則り、新更會精神を涵養徹底せしめ、忠實勇武の中堅青年を育成するにあり。
- 2、教育方針 智育偏重の弊を訂し、皇國民としての德育體育を尊重す。従つて嚴格なる行的訓練を以て終始す。毎月二回定期合宿、或は隨時に行軍、祈願參拜、勤勞奉仕作業等をなし又、毎朝始業前に朝の行事、靜觀等をなす。即ちその結果として本年度教練査閲に於て優秀の賞を受く。
- 3、卒業生 本年度第十一回六十四名、昭和八年度第一回より合計四百五十名を世に送り、各方面に活躍す。
- 4、學則並に行事概要等は畧す。

十一、經費

昭和十七年度決算 四七、七四〇、〇〇〇

258.2
101

昭和十八年十月一日印刷
昭和十八年十月五日發行

【非賣品】

編輯兼
發行人

淺井照次
千葉縣印旛郡成田町成田百九十三番地

印刷人

大友惟誠
千葉縣印旛郡成田町成田四〇二番地

印刷所

成田學園印刷部
千葉縣印旛郡成田町成田四〇二番地

發行所

成田山新勝寺

七四

東千35

258.2
101

製本控	同第	號
258.2	101	號
書名	成田山事業概要	昭和17年
著者	成田山新勝寺編	
受入	18年12月31日	圖書
備考		

東千30

十圖

昭和十七年度

雜誌新聞寄贈者芳名

(每號寄贈者のみを掲ぐ) (五十音順、敬稱省略)

石川 富士雄
石橋 俊一
駒林 清一
高田 芳枝
瀧川 高之助
行方 喜一
忍頂寺
山室 久
山本 久
愛育會
岩波書店
宇宙社
英語青年社
大坂商船株式會社
大坂每日新聞社
海外同胞中央會
海防義會
華道公論社
香取神宮事務所
雅文會
華北電機株式會社
録田共濟會
關西ベント株式會社
觀音世界運動本部
郷土社
組合金融協會
軍人援護會
警眼社
京城帝大史學會
研究社
公正會
厚生省労働局
與風會
高野山大學新聞部
國際反共聯盟
古溪學會
齋藤報恩會
實業之世界社
尺貫法存續聯盟

十善會
修驗社
情報局
新佛教徒同志會
神變社
前進座
全日本眞理運動本部
禪の生活社
大正大學出版部
大正大學淨土學研究室
大政翼賛會宣傳部
大東塾
大東文化協會
大日本與亞同盟
大日本淨曲協會
智山學會
中國和文出版社
朝鮮總督府
千葉縣統計協會
千葉縣農會
土筆社
東亞文化園編輯局
東京科學博物館
東京工業大學
東京帝大佛教青年會
東京電氣株式會社
東寺事務所
動物愛護社
東洋協會
東洋大學護國會
持許局
成田山新勝寺
成田町役場
日滿經濟調查局
鶏の研究社
日本弘道會
日本五線社
日本赤十字社
日本拓植協會

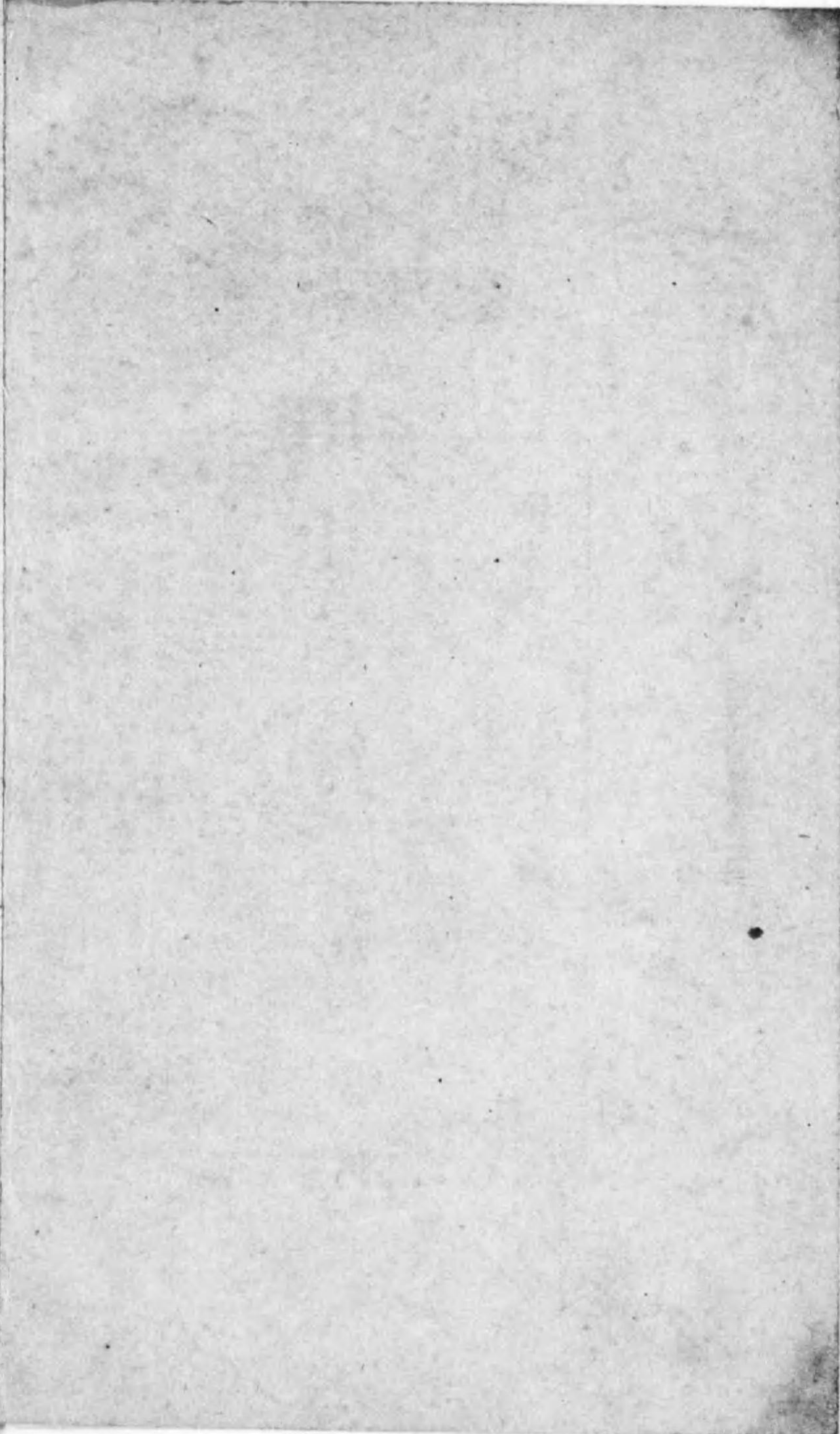
日本電機株式會社
日本のローマ字社
日本文化中央聯盟
野田商專映画部
被服協會
釜山商工會議所
不二越鋼材株式會社

佛教同願會
通路發行所
法華會
九州鑛工技術員協會
文部省社會教育課
謠曲界發行所
翼贊政治會
よろこび會
立正大學清白詩會
ローマ字ひろめ會
早稻田大學校友會

青森縣立圖書館
秋田縣立圖書館
池坊華道圖書館
石川縣立圖書館
今治市立明德圖書館
愛媛縣立圖書館
大橋圖書館
神奈川縣圖書館協會
金澤文庫
華北居士林圖書館
京城府立圖書館
高知縣立圖書館
小村侯記念圖書館
斯道文庫
彰化市立圖書館
台中州立圖書館
台灣總督府圖書館
寶塚文藝圖書館
朝鮮總督府圖書館
千葉縣圖書館
帝國圖書館
鳥取縣立圖書館
富山縣立圖書館
長崎縣立圖書館
長野縣立圖書館

奈良縣立圖書館
新潟縣立圖書館
日本圖書館學研究所
函館市立圖書館
福岡縣立圖書館
旅順圖書館
北京近代科學圖書館
滿洲國中央圖書館籌備處
滿鐵大連圖書館
滿鐵哈爾濱圖書館
宮城縣立圖書館
山口縣圖書館協會
山梨縣立圖書館
四日市圖書館
立正大學圖書館
龍谷大學圖書館
旅順圖書館

258.2
101



終